

始



14.6.23



近畿地方修學旅行案内

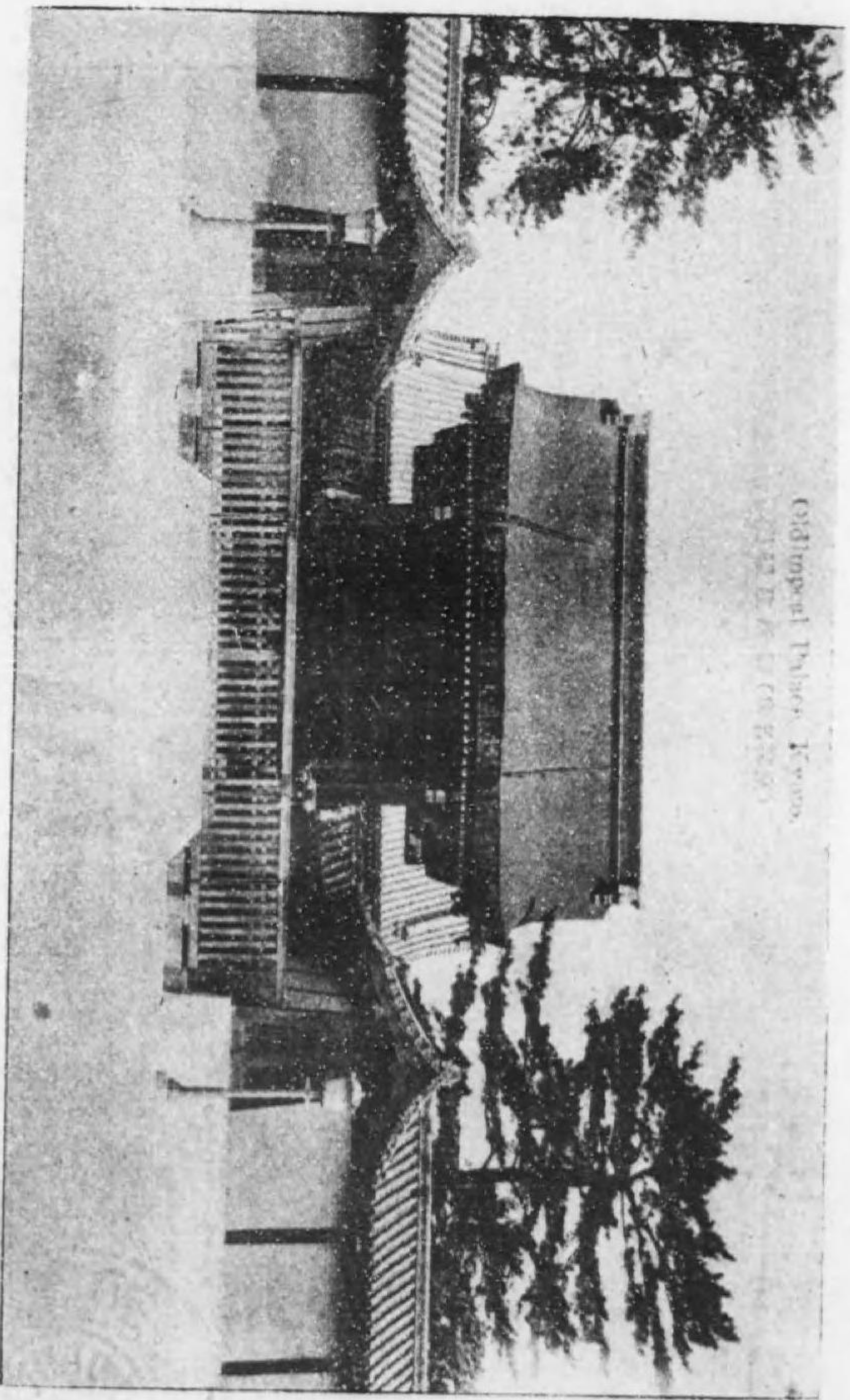
京都府立京都第二高等女學校々友會編



修學旅行案内

京都府立京都第二高等女學校々友會編

大正
13. 10. 2
内交

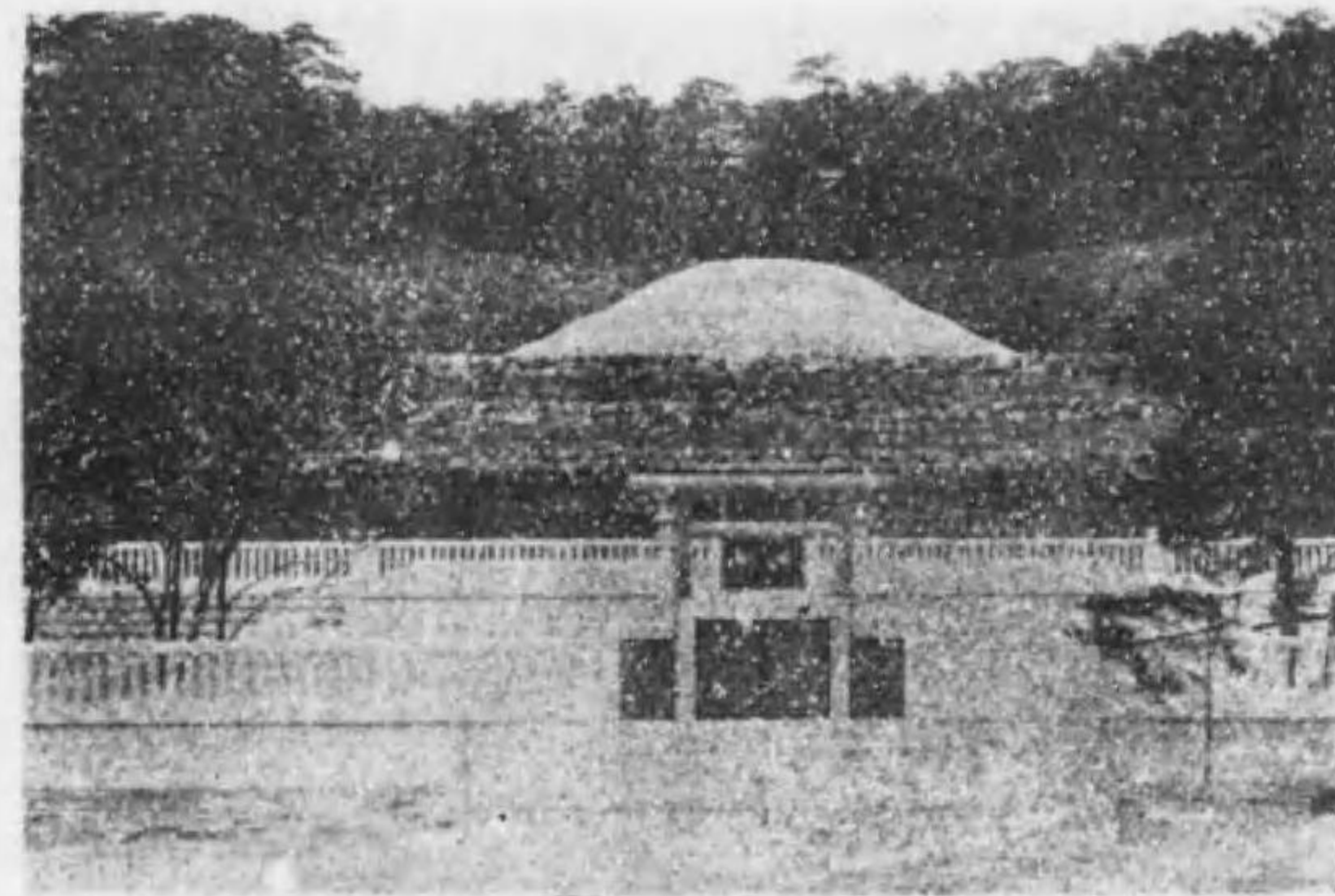


Old Imperial Palace, Kyoto
1912 (No. 100)

御 所 建 禮 門



知恩院山門



伏見桃山御陵



北野天満宮



二條の城



清水寺全景



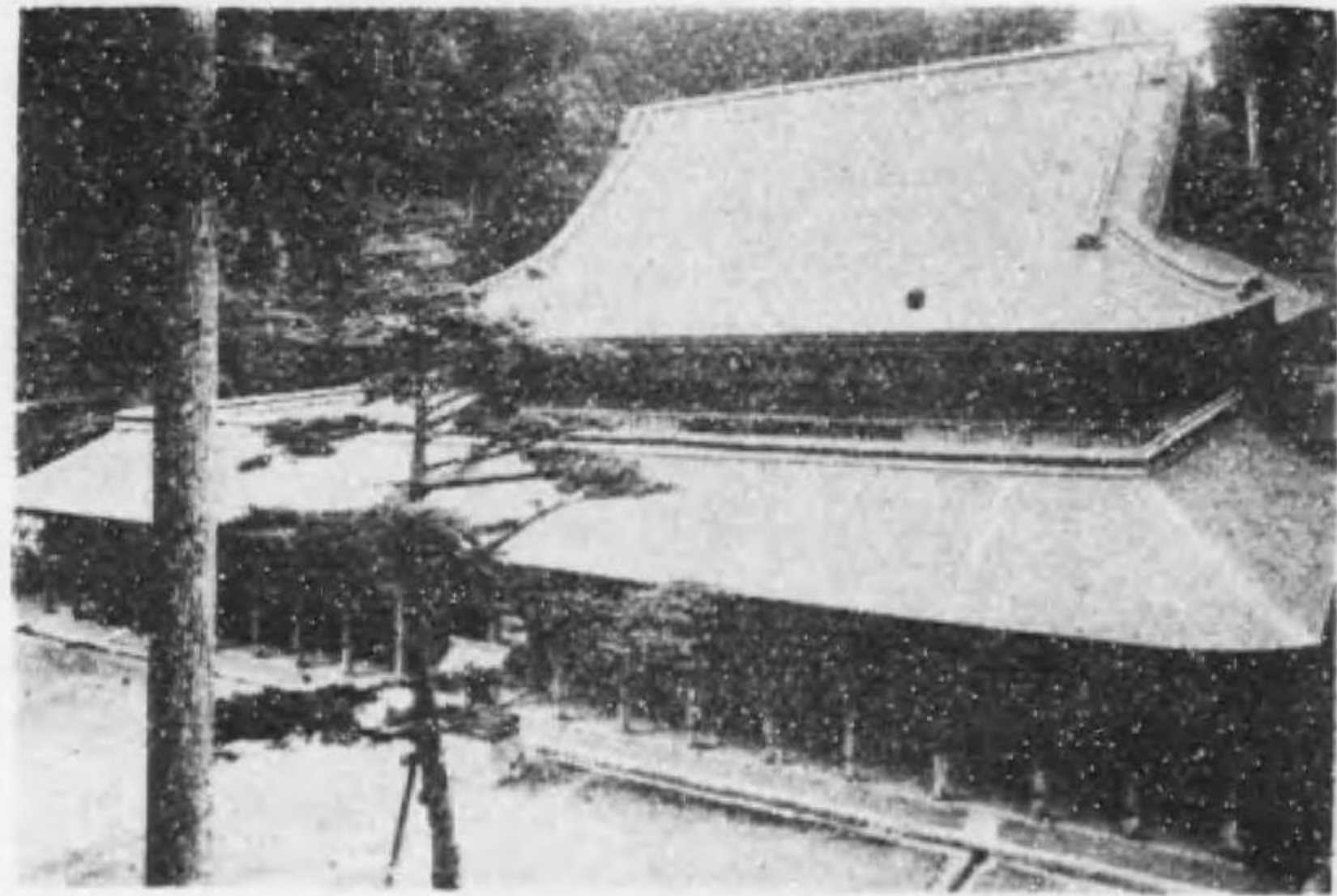
三条大橋



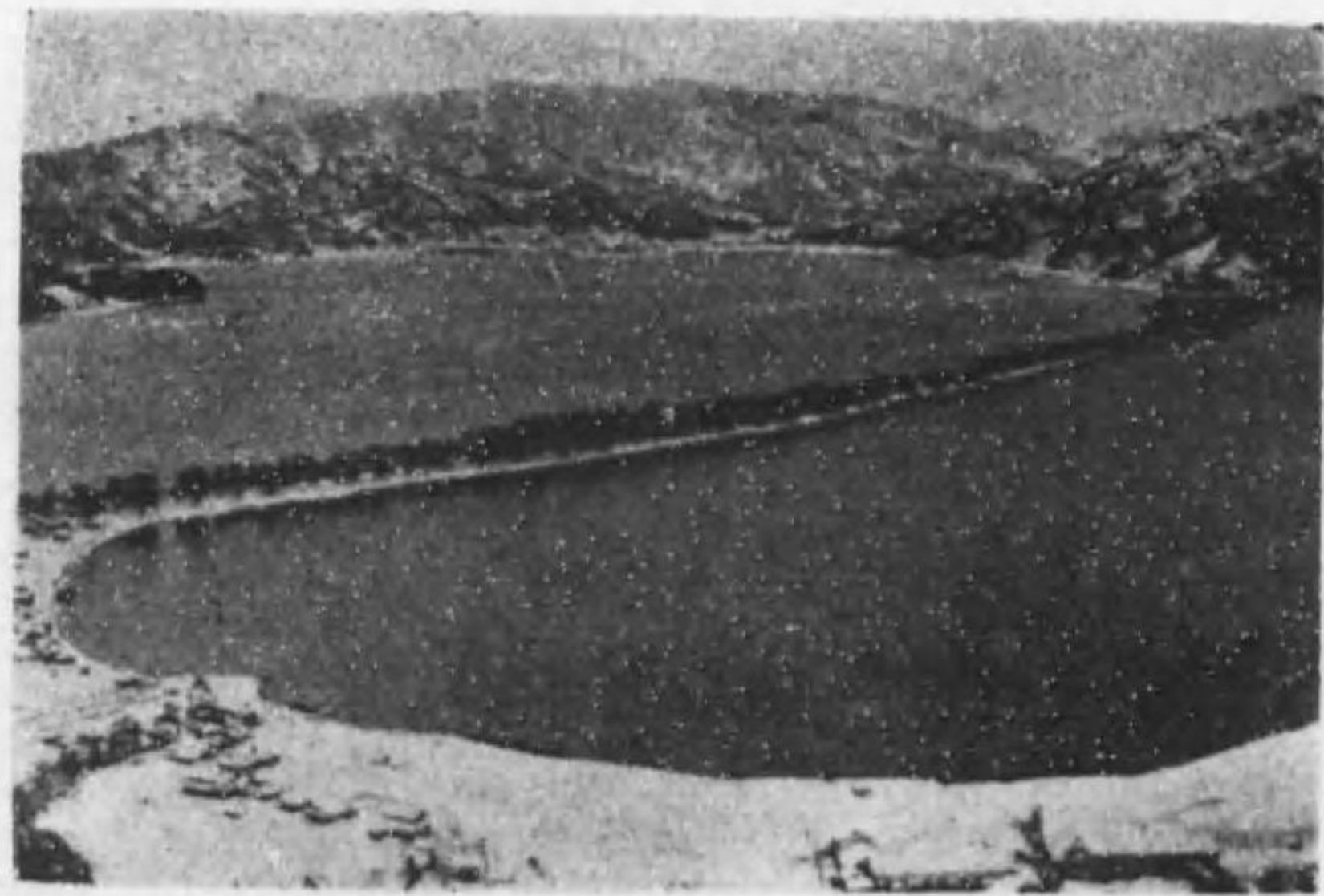
金閣寺



嵐山波月橋



堂 中 本 根



立 橋 の 天



塔 の 寺 東



春 日 神 社



大 佛 殿

京畿の山川が何となく人を引きつけるのはその背後に歴史の事蹟をもつて居るからである。俳聖芭蕉が「夏草や兵ごもの夢の跡」と歌つたやうに、一草でも一木でも鐵片でも石塊でもそれに傳説や因縁が添へられて居ると、格別の情味を惹起するのである。まして史上著名の出来事が終始した所は一層人の情感を唆るものである。だから京畿の名勝舊蹟は今見る所の形貌から進んで吾人の内心に深い印象を與へる。この印象は纏て人を美化し徳化し靈化する。斯う考へると京畿の山川を尋ねたり社寺に詣でたりすることが多大の教育的効果を表はすことは最早多言するまでもない。本校が時を定め方面を定めて修學旅行を行ふの深意はそこにある。この一篇は、その印象を興ふる手引となつて、これを手にしてあの山河社寺を巡覽する人々が、皆美化され徳化され靈化されることを期待して編まれたものである。どうぞ期待の裏切られないことを望む。

京都府立京都第二高等女學校にて

萩 原 忠 作

大正十三年天長節日

序

一

532-65

凡 例

一、本校が定期及臨時に行ふ遠足や修學旅行の際いつも不便に感ずるのは目的地の説明に用ひる刷物であつた。従來はその都度謄寫版で印刷して生徒に渡したものであるが、印刷の煩はしきは忍ぶとするも、印刷の出来ばえが不鮮明であつたり保存に都合が悪かつたりして方法を改める必要を感ずるのは久しいことであつた。

一、偶、大正十一年秋、遠足及び旅行地の割當を整理せんが爲に本校教諭中香山益彦・兼松芳江・小林政吾・平川常太・小澤信吉の五名が委員となつて研究協議した序を以て、之まで不便を感じてゐた刷物を一冊の纏まつた活版印刷書にしようといふことになつて、右五名が分擔して執筆し、更に原稿を整理した上印刷したのが

本書である。委員の中平川氏は中途轉任し教諭久保田眞が之に代つた。

一、記載事項は京都奈良を主として詳記し、大阪・神戸・宇治山田その他を客として稍略記した。遠足及び旅行の割當地以外をも多く附記したのは、割當を變更した場合及び生徒が各自遠足でもする時の手引とする爲である。

一、本書編纂の参考とした圖書は本文中の「参考圖書」の項に擧げたものとその外二三であつて、本校の生徒自習室に殆ど皆備へてある。本書の説明にあきたらぬ者は進んでそれ等の圖書に就て研究して貰ひたい。

一、索引は搜し易くする爲にすつかり表音的假名遣に従つて排列した。

大正十三年九月全部の校正を終へた日

編纂委員の一人 小澤信吉記す

目次

一、總説	一
二、參考圖書	八
三、京都御所及離宮	三三
皇居附仙洞御所・大宮御所・御苑・平安京の規模及變遷、二條離宮、桂離宮、修學院離宮		
四、京都中央部	三三
神泉苑、聚樂邸址、太政官址、相國寺、護王神社、梨木神社、法成寺址、革堂、下御靈社附上御靈神社、妙滿寺、本能寺附日蓮宗本山、三條大橋附鴨川及橋、京阪電車、五條大橋、新京極、高瀬川、堀川、六角堂、壬生寺、佛光寺、西本		

願寺、東本願寺附涉成園、興正寺、本國寺

五、京都東部

東山、青蓮院、粟田口、知恩院、圓山公園、將軍塚、八阪神社、雙林寺、東大谷、高臺寺、靈山、建仁寺、六波羅密寺、八阪の塔、清水寺附清閑寺、鳥部山、西大谷、養源院、妙法院、智積院、方廣寺附耳塚、豐國神社、豐臣秀吉の墓、京都恩賜博物館、三十三間堂

六、京都東北部

熊野神社、平安神宮、岡崎公園、武德殿、動物園・白川、市公會堂、商品陳列所、疏水、蹴上發電所、水道淨水地、南禪寺、鹿ヶ谷、永觀堂、若王子神社、吉田神社附吉田山、京都帝國大學、百萬遍、黒谷、眞如堂、如意嶽、銀閣寺

七、京都南部東南部及郡部

東寺附西寺、羅城門址、鳥羽殿址、泉涌寺、東福寺附萬壽寺、稻荷神社、藤森神社、深草、伏見、桃山御陵、桓武天皇陵、木幡、木幡諸陵墓、萬福寺、三室戸寺、菟道稚郎子墓、橋寺、宇治神社、興聖寺、宇治川、浮島の塔、宇治川發電所、宇治橋、宇治町、平等院、縣神社、宇治茶、日岡、元慶寺、山科本願寺別院附蓮如上人墓、佛光寺址、田村塚、大石良雄潛居の地、勸修寺、隨心院、醍醐寺附小栗栖、法界寺、笠置山附笠置行在所址・笠置温泉、宇治以南鐵道驛附近の名勝

八、京都北部及郡部

賀茂御祖神社、建勳神社附舟岡山、大德寺、光悅寺附蓮月尼隱棲の地、植物園、賀茂別雷神社、松崎、赤山神社、詩仙堂、三宅八幡、鞍馬寺、貴船神社、八瀬、大原、三千院、極樂院、來迎院、勝林院、寂光院

九、京都西北部及郡部……………三三

西陣、西陣織物館、西陣京極、朱雀大路附大極殿址、北野神社附紙屋川、平野神社、金闕寺、衣笠山、等持院、龍安寺、仁和寺、雙ヶ岡、妙心寺、廣隆寺、高尾榊尾榊尾附神護寺、西明寺、高山寺

一〇、京都西方郡部……………三六

廣澤池、大覺寺、清涼寺、二尊院、野の宮の址、龜山、嵐山附渡月橋・大悲閣・法輪寺、保津川下り附龜岡城址・篠村八幡宮・菩提寺、愛宕山、愛宕神社、月輪寺、梅宮神社、松尾神社、粟生光明寺、長岡・長岡京址・長岡天滿宮、天王山、寶積寺、妙喜庵、離宮八幡、水無瀬神社、櫻井驛址、石清水八幡宮・男山陣址

一一、天橋方面……………三七

三舞鶴附田邊城址、宮津町、天の橋立

一二、近江方面……………三八

琵琶湖、天津市附大津宮址、三井寺附正法寺、唐崎、堅田の浮御堂、白鬚明神、比良山、竹生島附都久夫須麻神社・竹生島辨天堂・竹生島觀音堂、多景島、沖の白石、沖の島、長命寺、比叡山、延曆寺、石山寺、南郷、勢多橋附建部神社、粟津、膳所町附膳所城址、坂本附坂本城址、日吉神社附阪本三橋、來迎寺、西教寺、彦根、多賀神社、八日市町附永源寺、安土城址

一三、奈良和歌山方面……………三三

奈良市附平城京址、開化天皇陵、猿澤池、奈良公園、興福寺、奈良皇室博物館、氷室神社、春日神社附春日野・春日山・三笠山・嫩草山、手向山八幡宮、東大寺、正倉院、その他市内の名勝（佐保川、般若寺、極樂院、元興寺、新藥師寺、頭塔等）平城京址の名勝（興福院、不退寺、海龍王寺、法華寺、大極殿址、藥師

寺、唐招提寺)郡山町、法隆寺、法隆寺附近の古寺(法輪寺、法起寺、中宮寺)、
 畝傍(橿原宮址、橿原神宮)、奈良畝傍間驛附近の名勝、畝傍山及其の附近の御
 陵、吉野山、吉野山へ行く道、吉野宮、長峯の櫻、村上義光の碑、口の一目千
 本、吉野の町、藤尾阪、藏王堂、實城寺址、吉水神社、勝手明神、如意輪寺、
 後醍醐天皇陵、中の一目千本、竹林院、上の一目千本、忠信力戦の址、奥の一
 目千本、和歌山市附和歌の浦、橋本町、高野山、(學文路、女人堂、九度山、大
 門附近、壇場附近の堂塔、本坊、奥の院)

一四、大阪神戸方面……………三六七

大阪市附大阪城址・四天王寺・生國魂神社・高津神社・道頓堀・造幣局・築港・堂島、
 堺市附常樂寺・少林寺・妙國寺・祥雲寺・南宗寺・寶珠院・大濱公園・濱寺、四條巖神
 社、片町線の沿道、神戸市附湊川神社・メリケン波止場・生田の森・諏訪山・大倉

山公園・楠寺・川崎造船所・湊川・平清盛塚・福原宮の遺址・經島・和田岬・須磨附須
 磨寺・一の谷の古戰場・鴨越・敦盛塚

一五、伊勢方面……………四〇八

參宮沿道、宇治山田市附外宮・内宮・五十鈴川・神宮司廳・徵古館・農業館・二見ヶ
 浦附鳥羽・鳥羽城址・日和山・樋の山公園

附 錄

- 一、各學年遠足地及旅行地割當表
- 二、日本建築各時代の特徴及現存建築物表



總說

近畿の地は名勝古蹟が多く文學美術宗教にゆかりの深いのを以て名が轟いてゐる。

大和國は神武天皇創業の地にして史上に現れてより平安奠都に至るまで、帝都の置かれし數實

に四十一で、千四百餘年に亘つて歴聖の在りました所、殊に平城京は元明天皇以後七代七十餘年

間「咲く花の匂ふが如く」制度文物の昌へた都であつた。隋唐の文化を輸入同化して、都城の制は

勿論、學問、宗教、美術工藝より風俗儀法に至るまでも、花ならば爛漫として咲誇れる櫻花の如

く、典雅壯麗の致を極めた。「櫻かざした大宮人」のみやびやかさ、「白銀の目貫の太刀を下けは

きて」、都大路を貫り行く公達のもの優しさ、その姿を想像するだけでも、人をして恍然たらしむ

る。數多き宮居のあこ、殊に平城京の遺址、法隆寺なきをはじめ遺れる寺々の建築、慈悲端嚴の相豊かなる佛像の數々、一つこして古を語らぬものはない。下つて吉野朝の遺跡は吉野、賀名生に、「歌書よりも軍書に悲しき」物語を込めてゐる。

山城國は山河襟帶自然に城の姿をなし、水明に山紫の美なる國である。京都は桓武天皇奠都以來千百年後の今も尙、古の姿を傳へて依然として平安の都である。藤原氏の盛期には優雅織麗の貴族文化が平安文化の基礎を作り、世は鎌倉、室町、江戸に次第に下つて、政權は七百年間武家の手に移つても、日本文化の中心はこゝであつた。顯密二宗以後の各派の佛教は概ね此處で育まれた。平安時代の國文學、鎌倉室町兩期の軍記、佛教文學は勿論、江戸時代の漢文學國文學、下流社會に悦ばれた軟文學さへもこゝが誕生地であつた。土佐春日の大和繪、雲谷狩野の水墨畫より江戸時代の各派の繪畫、畫といふ畫は悉くこゝで芽ぐみこゝで花咲いたといつても過言ではない。

能狂言も芝居も茶道も生花も京都ではじまつた。京都はあらゆる學問、あらゆる藝術の淵藪であつた。随つて各宗各派の本山大寺や、由緒の古い神社が市の内外に多く、各時代の代表的建築物、美術、工藝品も亦夥しく残つてゐる。奠都當時の都城の制は、度々兵亂火難の災禍を経て、原形は大に損なはれたが、今尙市街の區劃や町名等に遺跡を辿ることが出来る。その他の歴史文學に縁の深い形勝は市の内外に夥しい。

攝津は古くは「津の國」といつて「難波江」「難波瀉」の名と共に史上に古くから傳へられてゐる。神武天皇東征の時はじめて船をつけ給うた所は「なには」から遡つた「草香」であつた。仁徳天皇の高津の宮、孝徳天皇の難波の都は今の大阪の地であつた。兵庫は平家が都を遷した所である。淡川の戦ひは大楠公の忠烈、水戸義公の建碑と與に三尺の童子も知つてゐる。「心あらん人に見せばや」ミ語はれたのは今の大阪あたりの春景色で、「難波江の昔」はしばしば歌人の吟

詠に入つた。須磨は源語、平語の小説又は實話の舞臺として人口に膾炙した。本願寺が別院を
 おいてから、大阪の名が人に知られ、間もなく豊臣秀吉がこゝに「難攻不落」の巨城を構へるに
 至つて一躍して日本三ヶの津の一到に數へらるゝやうになつた。商業都市としての大阪が江戸にも
 優る勢力を持つやうになつたのは江戸時代よりのことである。新しい町であり又商人の町である
 爲に、割合に史蹟は乏しく、文學に關する名勝は尠いが、契沖、西鶴、秋成を生み、宗因、門左
 衛門を住ましめただけあつて、平民文學、民衆藝術には縁故が深い。操人形淨瑠璃芝居は大
 阪が本場である。「喰倒れ」^{くひたれ}といはれたのは大阪市民の口舌の趣味の發達してゐた證據である。神
 戸は今こそ六大都市の一として、有數の貿易港としてその名が響いてゐるが、江戸末期外國との
 關係が始まつて以來の發達である。洋風の市街建築、貿易取引の盛況、巨大なる造船場等はこの
 地の特色である。大阪神戸地方へ修學旅行するものゝ眼のつけ所は京都奈良は自ら異なる所が

無ければならぬ。

伊勢國は古くは「常世の浪のしきよする國・かた國のうまし國」^{いせのなみのしきよするくに}として神代より知られた國で
 ある。近くは參宮旅客の送迎で賑ひつゝある國である。そればかりではない。國學の大家本居宣
 長、谷川士清の生れた國である。南に志摩國を控へ東に波靜かなる伊勢海を擁して尾張、三河と
 相對し、桑名、四日市、津等の港が程よく海岸に並んで交通商業の門戸をなし、到る所に海水浴
 場も開けてゐる。

近江國は江州商人ミ琵琶湖を以て聞えた國で、成務(高穴穗)、天智(大津)、聖武(紫香樂)、三
 帝が都を置かれたこゝもあり、東部南部には彦根、安土等の古城址が戰國の歴史を語り、西南部
 には首都の大津を中心として南は石山、粟津より北は堅田、比良ヶ嶽に及んで所謂近江八景の名
 勝が點在する。湖西高島郡青柳村には近江聖人藤樹先生の書院が保存され、同大溝村には近藤重藏

参考圖書

見學を目的とした遠足旅行には、豫め、目的地に就いて知悉しておくのが肝要である。その上地圖や手頃な参考書を携帶し、必要に応じて隨所に之を開き見らるゝ用意をしておかねばならぬ。かゝる準備がないならば見學の目的はその半ばすら達せられぬ結果を見るであらう。「案内者」にはの合はぬ歌を詠み、「案内者」から説明されたり、路傍の人から聞いたことには時に「案内者」でもない誤りがあるものである。

地圖は陸地測量部著作の五萬分の一圖と、各地鐵道驛構内で賣つてゐる各都會地市街圖の二種があれば充分である。

鐵道沿線の名勝等の概略を知らんには鐵道省發行の「鐵道旅行案内」の新版がよい。

寺院のここを調べるには鐵道省發行の「お寺まるり」、神社のここを調べるには同じく「神まうで」がよい。この二種さへあれば全國有名な神社佛閣の由緒縁起沿革から建築美術、寶物等まで簡明に知ることが出来る。和辻哲郎の「古寺巡禮」は美術のここを詳に知るのに便だ。

近畿地方の名勝等を一冊に纏め記した手頃な本は、田山花袋著の「新撰名勝地誌卷一畿内」同氏著「京阪一日の行樂」位なものである。前者は簡明な地理書記述で、後者は趣味を加へた紀行文記述で出来てゐる。藪野椋十著の「上方見物」、金尾種次郎の「畿内行脚」、横山達三の「新入國記」は部分的ではあるが文學的に記述したものである。しかし何れも學生向でない。畿内の地理は山崎直方著の「大日本地誌第四卷畿内」がよい。

京都附近を記したものは

参考圖書

京都帝國大學學友會發行 「京都史蹟案内」

川島元治郎著 梅原末治増補 「京都案内」

京都市參事會著作 「京都名勝記」

京都市會編 「新撰京都名勝誌」

なごが手頃である。前二者は學生用として便利な書物である。

奈良附近を記したものは

奈良縣協賛會編 「大和めぐり」

があり、黒田鵬心著「京都ニ奈良」は工藝美術方面を主に記した小冊子である。

大阪附近を記したものは

大阪府廳著 「大阪府名所舊蹟案内」

その他稍大部な参考書は

吉田東伍著 「大日本地名辭書」 上卷

京都府編 「平安通志」

太田爲三郎著 「帝國地名辭典」

三省堂發行 「日本百科大辭典」

八代國治外二名編 「國史大辭典」

大阪市編 「大阪市史」

白井小三郎著 「京都坊目志」

秋里籬島著 「都名所圖會」

同 「大和名所圖會」

参考圖書

なごである。要するに書物は死物である。活用して初めてその効果を示すものである。

近畿地方都市の人口 (大正九年十月一日現在)

大阪市	一二五二、九七二	奈良市	四〇、三〇三
神戸市	六〇八、六二八	宇治山田市	三九、二七〇
京都市	五九一、三〇五	尼崎市	三八、四五〇
堺市	八四、九九五	四日市市	三五、一六九
和歌山市	八三、四九八	大津市	三一、四五六
津市	四七、七四二		

御所及離宮

京都御所

(上京區、北は今出川通、東は寺町通、南は丸太町、西は烏丸通、東西約六町、南北約十二町)

舊皇居は御苑の中央にあつて南面し、その東南に近く、大宮御所、仙洞御所が西面して並んでゐる。

皇居 堺町御門から御苑に入るに北方正面に見える。堺町御門の方へ向いてゐる御門は正門で建禮門といひ、建禮門の中に承明門があり、承明門の奥に棟高く南面してゐるのが紫宸殿である、清凉殿は紫宸殿に近く接してその西北に東面してをる。尙御圍垣の中には宣陽殿、常御殿、小御所、御學問所その他多くの建物が連なつてゐる。

御所及離宮

桓武天皇平安奠都の際造營された内裡は、大内裡（北一條通兩二條通）の殆ど中央にあつたので、今の皇居よりは遙に西方で少し南に當つてゐる（北中立賣通、南出水の少し北）皇居衰廢するに及び里内裏の御使用始まり、市内數ヶ所に轉々したが、南北朝時代、北朝の光明院が今の皇居（當時東洞院土御門内裏といつた）に御住居になつてから、遂に永く皇居になつた。應仁亂後甚だしく荒廢したのを、織田豊臣二氏が復興し、徳川氏に至り舊觀に復したが、その後屢々大火の爲に炎上し、今の皇居は安政三年建造されたものである。

仙洞御所 御水尾上皇の御隠居所として造營せられた所であるが、その後數回炎上して遂に造營せられない。唯幽邃閑雅の林泉が御垣の内に舊觀を傳へてゐる。

大宮御所 徳川幕府が東福門院の爲に造進した所で、當時は皇居よりも麗しいと稱せられた。安政の火災に燒失した後、再造した常御殿が残つてゐる。

御苑 皇居の周圍の御庭で、周圍約一里南北に長い長方形の廣い地域（面積廿六萬八千坪）である。明治の初年迄は、宮家、公卿等の邸宅が狭い道路を挟んで、皇居の周圍に連なつてゐた。車駕東京へ遷られて後漸次取拂はれて空地になつたのを、明治天皇の思召で、種々の樹木を栽ゑて御苑とせられたのである。御苑の内に舊時の面影を残すものは、明治天皇の産湯に御用ゐになつた、「祐の井」（皇居の東北、中山邸のあごに鐵柵で圍まれてゐる）九條家の林泉（堺町御門を入つた西方林間にある）後水尾帝遺愛の「車返の櫻」（中立賣御門を入つた所）等である。堺町御門、蛤御門は元治元年長州藩の兵が侵入した時激戦した所だが、御門は今の位置より各約二三十間内方にあつたのである。

平安京の規模及び變遷 平安京は桓武天皇の延暦十二年から着手し約十三年かゝつて落成した。北は一條（今の一條通）から南は九條（今の東寺の南大門の前の通りに當る）まで一里十一町廿

八間餘、東は東京極(今の寺町通)から西は西京極(北は雙が岡の東—山陰線花園驛は丁度京極大路の上に當る—南は葛野郡京極村)まで一里四町五十間餘、南北を九つに大きく分け東西を八つに大きく分けて、その間に大路を通じ、尙それを碁盤の目のやうに細かく分けて町とした。(京の中央部を南北に貫く大路は朱雀の大路で四十五間半、柳櫻の並樹を植ゑて、美觀を添へ、朱雀大路の南端は羅城門、北端は大内裡の正門(朱雀門)に達してゐる。大内裡は、一條二條(今の二條通)との間に東の大宮(大宮通)西の大宮(今の御前通)—北野神社の東を南北に通つてゐる)の間にあつて、南北十二町廿七間、東西十町廿四間の大きさであつた。大内裡の中には周圍に官衙が立並び、内裡は中央より少し東に偏してゐた。平安京はこのやうに大規模尊嚴な體裁であつたが、右京は土地低く濕氣るので初めから人の住家も少く、已に清和天皇の頃に人民に耕作を許された程である。然るに左京は土地も高く、東山鴨川に近くして風致に富んでゐたから、鴨川以

東の地と共に漸次繁昌して、貴紳の邸宅があちこちに置かれ、後世京都市の中心部となるの兆を示した。

所が、高倉天皇の安元三年、即ち奠都以後凡そ三百八十年後に、五條以北が殆ど全部焼失したのを始めとして、徳川時代の終りまでに十三回の大火があつて、少きも千戸、多き時は十八萬戸も焼け失せ、殊に應仁の亂後凡そ百年間は市中は勿論内裡さへも焼野が原に化して雲雀が巢食ふほごであつたから、平安京の變遷は驚くべきものがあつた。織田豊臣二氏が尊王の業に勤め、京都の整理繁榮を謀つてから、漸く復興の緒につき、次いで徳川三百年の太平が続いた爲、度々の火事はあつたが、今の京都の基礎は出來たのである。

豊臣秀吉が京都の區劃を定めた時、大體平安京の舊に依つたから、今以て京都市大部分の區劃は整然としてゐる。且又、平安京當時の通りの名や、位置をそのまゝに傳へて往時を偲び、變遷

の跡を研究するに都合がよい。

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける
神ながら選び定めて國土をたひらの都今盛なり

素性 秋成

夕霞都の山は皆圓し
子規平安城をすぢかひに
行く程に都の塔や秋の空
掛乞も京は女の美しき

蝶夢 太祇村 四明

二條離宮

(二條停車場東北五町、市
電二條堀川停留所「西」)

徳川氏が將軍上洛の時の宿所に當てる爲に慶長八年に造營した二條城を、明治十七年に離宮にせられたのである。高き石垣深き濠に、徳川氏が朝廷を壓して威を示さんとした意志が今尙伺はれる。

正殿は、舊二條城二の丸の遺物で、間取、天井、襖、彫刻等まで桃山時代書院造の豪壯華麗の特長を示してゐる。

一のう苔野、御所の溝は三尺足らずの流れであつたのに此の城は仰山な深い濠を廻らしてある。御所の御質朴なに比べて此の御殿の結構さは、餘りさいへば徳川の奴め憎いでは無いか、善う罰が當らなんだものぢ

やう」

「感心！叔父さん。其の志が勤王家の叫びです。貴方をして今年早く生れて維新の前に在らしめば、我が藩は薩長の下に立つことは無かつたでせう。私も又蕪野伯爵の令姪として校長の尊敬を拂はるゝこと、少くも同級の二三子に劣らなかつたでせう。惜しいことをしましたね」蕪野椋十の上方見物の一節、二條城を拜觀した叔父甥の問答)

桂離宮

(葛野郡桂村下桂、七條大宮停留所より西約卅町)

豊臣秀吉が天正十七年に、正親町天皇の皇孫八條宮智仁親皇の爲に建營せる別業の跡で、御子智忠親王の時、徳川幕府は御内命により小堀遠州(當時伏見奉行、名は政一)に命じて書院、林泉等悉く考案増築せしめた。地域一萬三千餘坪、桂川の水を引きて二千餘坪の池を湛へ、十餘の

島嶼池中にあつて、周囲の築山と相呼應し、亭榭樹木の間に見隠して、幽邃閑雅仙境に入るの懐がある。今そのまゝ残されてゐる。離宮となつたのは明治十六年のことである。

桂川やなこす年魚のかげ見えて廣瀬涼しき夏の夜の月
踏青や裏戸出づれば桂川
鳴 雲

修學院離宮

(愛宕郡修學院村、市電田町停留所より東北約一里十町)

赤山神社の南方一帯の松柏繁茂せる所は修學院離宮である。離宮は地積八萬四千餘坪。上中下の三苑に別れ、各々御茶屋があつて上御茶屋に屬する上苑が一番廣い。承應年中幕府が後水尾天

御所及離宮

御所及離宮

皇の爲に造進した者であつて、其の後も屢々行幸、御幸があつた。上御茶屋は東北に位して地勢高く、背面は蒼鬱たる松山を負ひ前面洋々たる浴龍池を湛へ、遙に京洛を越えて山城盆地を一望の中に集め非常に景色がよい。

○ 遠方の山より上に雲よりも白きを見れば淀の川水

○ 靈元上皇

暁や杳音霞む紫宸殿
春の水仙洞御所を流れけり
名月の御苑松風ばかりなり

櫻苞
鼠骨
悠然

京都中央部

神泉苑 (二條離宮の南)

桓武天皇平安奠都の初、置かれたる天皇御遊宴の場所、東は大宮、西は壬生、北二條より南三條に及ぶ、東西二丁南北四丁の地域を占め、樓閣林泉の美實に平安京第一と稱せられた所であつた。が今方一町に足らぬ小さな所となつた。苑中に池あり、池中に小祠がある。弘法大師が龍神を請じたのも、小野小町が和歌を詠じて雨乞をしたのも此の池である。鎌倉時代以後荒廢したのを、徳川時代僧の覺雅が惜しんで、茲に一寺を營み、東寺の末寺として今日に及んだのである。最近に史蹟名勝の一として保存を指定された。

名月や神泉苑の魚をどる

燕村

所司代邸址 二條離宮の北、丸太町線の南に沿ひ、大宮通の西であつた。今邸址の立樹が二三本稍高く古を語つてゐる。因に、幕末に置かれた京都守護職は、今の京都府廳（市電府廳前停留所の北）の所に居たのである。

聚樂第址 (京都市上京區)

北は一條通、南は下立賣通、東は大宮通、西は千本通の間の地域で東西約五町南北約六町のである。豊臣秀吉が一世の豪華を盡し一建造した邸址で、天正十六年四月に後陽成天皇の行幸を仰ぎ諸侯をして遠敷せぬ誓をなさしめたこゝは「聚樂行幸記」に詳に記されてゐる。然るに文

祿四年この邸に居つた養子秀次が秀吉の意に協はずして亡滅し、間もなく邸舎は悉く破壊せしめられた。この邊りの町名地形なごに當時を偲ぶ資料が少しは残つてゐる。今市内に残つてゐる建物で聚樂の邸の遺物だこゝいはれてゐるのは

本派本願寺の飛雲閣

同 浴室

同 能舞臺

大徳寺 唐門

茶器さらす聚樂の第や風薫る 師竹

相國寺

(上京區御所の北、今出川
線同志社前停留所の北)

臨濟宗相國寺派の本山、萬年山と號す。京都五山の第二位。

足利義滿が夢窓國師を開祖として創立した。當時は寺域も廣く堂塔臺を並べて立ち、洛北の大禪刹として壯麗なものであつたが、應永元年に焼失して後、應仁の亂には戦區となつて兵火の爲に全く烏有に歸し、久しく荒廢してゐた。豊臣氏、徳川氏が再興して舊觀に復したが、天明八年の京都の大火で法堂以外は全く焼失した。現在の伽藍はその後の建立に成つたものである。

本堂(法堂)(特別保護建造物) 豊臣秀頼の再建したもので、本尊は釋迦如來、様式は唐様で雄大の趣きがある。その南に佛殿の跡が松林に圍まれてあり、又その南に三門の跡がある。本堂の

東にあるのは開山堂で後水尾天皇の建立である。佛像、書畫の國寶となつてゐるものも多く、又古記録古文書の史料として貴重なるものを多く藏してゐる。

足利義滿の墓 子院の慈眼院墓地にある。

藤原惺窩の墓 子院の林光院墓地にある。

同志社大學 相國寺の傍にある。

○

竹の子や月に音なき相國寺

佳 棠

いざ竹の秋風聞かん相國寺

大 江 丸

護王神社

(上京區、御所の西で、烏丸通に面し、東面、蛤御門停留所の南)

和氣清麻呂及び其の姉廣虫を祀る。別格官幣社。

高雄の神護寺の境内に祀られてあつたのを、明治十九年に今の地に遷したのである。

すべらぎの神のみ筋の絶えせぬは君た、れしによりてなりけり
曇りたる道の鏡をうちわりて神の光をあらはしにけり

千浪
隆正

梨木神社

(上京區、御所東で、廣小路の北に南面してゐる 廣小路停留所の北)

三條實美、及び其の父實萬を祀る。別格官幣社。

社域はもこ三條家の邸宅のあつた所、梨木の名は町名をこつたのである。

法成寺址 御堂關白藤原道長の建てた法成寺は梨木神社の東南、京都府立第一高等女學校の寄宿舎の邊にあつた。地域は方二町、數多の堂塔が並んで、宛がら極樂淨土の様であつたといふ、その様子は榮華物語にくはしく、又荒廢した様子は徒然草に記されている。

革堂

(上京區寺町通、竹屋町より東へ突當つた所、寺町丸太町停留所より南一丁)

天台宗、寺名は行願寺。延曆寺の別院である。

一條天皇の御代、豊後の僧行圓の創立で、はじめ一條にあつたが天正年中今の地に移つた。行圓は常に鹿の革衣を着てゐたので、革上人といはれ、寺をば革堂と稱するやうになつたのである。

本尊は十一面觀世音菩薩。西國卅三番札所の中の第十九番として參詣者が絶えない。「徒然草」に
行願寺のはこりの連歌師のこゝが書いてあるが、それは一條にあつた頃のこゝである。

○
花を見て今は望みもかうだうの庭のちぐさも盛なりけり (願禮歌)

下御靈社

(寺町通り、丸太町
より南、葎堂の北)

祭神は崇道天皇(光仁天皇の皇子早良親王の諡號)伊豫親王等の八神で何れも宛死又は貶謫せ
られた人々である。創業は詳ならず、清和天皇の時疫病が天下に流行したので、之等の人々の
靈を慰むる爲に御靈會を修めたのが祭のはじめである。朝廷の崇敬が厚く維新前には祭日に神輿

が今出川御門前を通過のとき、天皇親しく朔平門(京都御所の北門)内から御拜があつた。もこ新
町下長者町にあつたが、天正中今の所に移つた。

上御靈社(上京區鞍馬口通御靈町烏丸線鞍馬口停留所東二町) 祭神、創建、下御靈社と同じ。この附近は御靈林といつて應仁
の亂に激戦のあつた所である。

妙満寺

(上京區寺町通二條下ル東側
寺町二條停留所の南約一町)

日蓮宗本山の一、山號妙塔山。

日什上人至徳二年開基。はじめ綾小路堀川西にあつたが、屢々火災に遭ひ、又天文五年には叡
山の僧徒に襲撃せられて和泉國堺に移つたこゝもある。今の地に堂宇を造營したのは天文十一年

のこみである。元治元年焼失し、維新前恢復した。

本堂は西面、明治十四年の再建、本尊は妙法蓮華經十界勸請である。堂前の「中川の井」は都下七名水の一として名高い。

祖師堂、本堂の北にあつて南面してゐる。

庭園、俳人松永貞徳が築いたもので、清水成就院の「月の庭」北野成就院の「花の庭」に相並んで「雪の庭」に稱せられ、月雪花三名園の一として知られてゐる。

「道成寺古鐘」、謡曲その他の文學に記された傳説で名高い古鐘で、道成寺(紀伊國)の焼失した後、天正十六年當山へ移された物で、元治元年の兵火で損したから、改鑄された。

本能寺

(上京區寺町通御池下ル、寺町二條停留所より南約二町東側)

日蓮宗本山の一。

日隆上人が應永廿二年に創建した寺で、はじめ五條坊門にあり、永享五年大宮六角に移り、天文十四年更に油小路六角に移つた。その時には東西一町南北二町の廣い境内を有してゐた。天文十年明智光秀がその主織田信長をこの寺で弑した時、兵火の爲に焼失した。天正十五年豊臣秀吉が市内寺院を市内の一定の地に移轉せしめた時、この寺も今の所へ移つた。度々火災に遭つて舊觀がなくなつたまゝである。

京都にある日蓮宗の本山は、この外、本禪寺(梨木神社の東) 妙顯寺(上京區、今出川新寺の) 妙

する)出町橋(委しくは葵橋)河合橋との二つで、鴨川と高野川との相合する所に架つてゐる。西が葵橋東が河合橋。出町より下鴨及び田中へ通ずる)荒神橋(荒神口より吉田へ)丸太橋(丸太町通り)にあつて、電車丸太町線が通じてゐる)夷川橋(夷川通り)二條橋(二條通)にあつて電車鴨東線が通じてゐる)三條大橋(三條通)にある)四條大橋(四條通)にあつて電車四條線が通じてゐる)團栗橋(四條大橋と松原橋との間にある)松原橋(松原通り)にある)五條大橋(五條通)にある)正面橋(大佛正面の通り)にある)七條大橋(七條通)にあつて電車七條線が通じてゐる)鹽小路橋(鹽小路通)にある)の十五橋で、洋風和風廣狭色々であるが、さりぐの風致を備へて、鴨の清流と共に京都の美觀を助けてゐる。

春水や四條五條の橋の下

蕪村

夕涼み四條五條の橋の間に輝きつゞく燈火の花

八代子

京阪電車 三條大橋の東詰から起り、七條の南方まで鴨川の東岸に沿ひ、それより殆ど一直線に伏見に至り、中書島で宇治線を分岐し、西南に向つて淀町(久世郡)を過ぎ宇治川木津川を越えて八幡町(綴喜郡)に至り、淀川の左岸を大阪府下に入り、遂に大阪市東北天満の終點に達する。

五條大橋

(五條通鴨川に架つてゐる、木屋町線「五條小橋」停留所東)

今の五條通りは古平安京の六條坊門通りであつて、今松原通りといつてゐるのが古の五條通りである。随つて昔の五條橋は今の松原橋の所に架つてゐたのである。それを今の所に移したのは豊臣秀吉が大佛殿を建立した時である。この橋は由來が古いので史上に名高く、牛若辨慶なごの

傳説も關係をもつてゐる。

橋の下加茂の河原に子等あまた風あげてをり元日の晝

愛子

新京極

(寺町の東河原町の西で、三條より四條に至る町である。四條競「新京極停留所」の北)

京極とは京の端の義で、平安京の東端を東京極、西端を西京極といつたのは平安奠都以來のことである、この地がこの東京極の遺跡(寺町)に近接してゐるので、新京極と稱するやうになつたのである。この地は元誓願寺の寺域であつたが明治の初年京都府知事が此に新道を開いて、劇場寄席の類を移轉せしめた爲に、それ以來東京の淺草や、大阪の千日前と相類する雑沓股賑の地になつたのである。

春の宵新京極の人通り

悠然

高瀬川

(二條木屋町より起り鴨川と並行して南流し、東九條村にて鴨川と交叉し伏見町の西を経て宇治川に合する。電車木屋町線は二條から五條まで高瀬川に沿うてゐる)

荒神橋邊より鴨川の水を分ちて運河にしたので、豊臣氏が角倉了以に考案せしめて、京都伏見間の漕運の爲に築造したものである。近年京都疏水が出来た爲に使用するこゝが少くなつた。

日うつりや高瀬へ分つ春の水

也好

朝寒や青物洗ふ高瀬川

露月

堀川

愛宕郡大宮村にて鴨川と分流した小川が南流して疏水分流を合せ、市内の一條戻橋で、その邊の諸溝の水を合したものが即ち堀川である。堀川の位置は大體平安京奠都當時のまゝであつて、下立賣通より上の邊は形も元のまゝだといふ。市電堀川線は中立賣通より南四條通まで、堀川の東の岸に沿うてゐる。堀川は市を南に貫いて紀伊郡に出て上鳥羽村で天神川に入る。

堀川や家の下行く春の水

大 祇

長き夜や堀川落ちる汐の音

子 規

六角堂

(下京區、六角通東洞院西入る、烏丸線嵯峨藥師停留所より北一丁東へ入る)

天台宗、正しくは頂法寺といふ。山號紫雲山。延曆寺末。

寺傳によるに用明天皇の御代、聖德太子の創建したものだといふから、京洛附近の寺の中では廣隆寺、八坂の塔と共に最も古いものに屬する。沿革は審には知れないが、嵯峨天皇の勅願所となつたことや、花山上皇の御幸のあつたことや、親鸞上人が百日參詣して、遂に一宗を開くの靈示を得たことなどは尤も名高く傳へられてゐる。

本堂、元治の兵火に罹つて後、明治十年落成した建築であるが、古來の様式に準據したもので

あらうこいはれてゐる。構造は六角二重屋造り（六角堂）といふ俗稱は之から生じたので、本尊は如意輪観音で、西國卅三番中第十八番の札所に當つてゐる。

○ 當寺の住職は歴代生花の家元としてその道の奥儀を傳へてゐる。その流派を「池の坊」といふ。池の坊は住職住房の名であつて、本堂の後方なる太子堂の西にある。

○ わが思ふ心の中はむつのかぎたゞ圓かれそ祈るなりけり（順禮歌）

壬生寺

（下京區佛光寺通坊城北、大宮佛光寺停留所西三丁）

一に寶幢三昧寺といひ、律宗で大和の唐招提寺の末である。一條天皇の正暦二年三井寺の僧快賢の開基（寺傳では聖武天皇の時の創建であるといふ）で、皇室の御歸依を蒙り寺門隆盛に及んだ

こともあるが、幾多の變遷があつて今日に至つた。本堂に安置せる地藏菩薩は名工定朝の作で靈驗殊にあつたかだこいはれて信心者が多い。

○ 壬生狂言 正安年中圓覺上人が融通念佛の妙理を婦女童蒙等に知らしむる方便の爲工夫した狂言で、毎年四月廿一日より五月十日まで大念佛會と共に行ふ。舞臺は本堂（東向）の北にある。

壬生寺の春のわざをき來て見れば言はでも物はなる世なりけり
菜の花に高き舞臺や壬生をどり

忠 秋
四方太

佛光寺

（下京區佛光寺通高倉、木屋町線佛光寺停留所の西）

真宗佛光寺派の本山、山號遊谷山。

建曆二年親鸞聖人の開基で興正寺と稱し宇治郡山科村にあつたが第七世了源上人の時(元應二年)洛東澁谷の地(今豊國神社ある邊)へ移つた。この時本堂、祖師堂等が整つて一向専修の棟梁たるにふさはしい盛觀を示した。後醍醐天皇の勅で寺號を佛光寺と改めた。天正年間豊臣秀吉が大佛殿建設の爲に、當寺の寺域を望んだので、現在の地へ移轉した。堂宇は天明天治の兩度の火災で焼失したが、明治十五年再建した。

大師堂 中央にあつて東面し堂宇中尤も大きい。その南に阿彌陀堂があり、同じく東面してゐる。その他宸殿、白書院、奥御殿等多くの殿堂が立並んでゐる。

西本願寺

(京都市下京區堀川通七條
北堀川七條停留所北一町)

眞宗本派の本山

文永年間の開祖親鸞聖人の女、覺信尼が聖人の墓所(東山大谷)に堂を建立したのを創始とし、當時龜山天皇より本願寺の號を賜はり、爾來連續して續いてゐる。歴朝の尊信を得たが、念佛宗撲滅を企てる南都北嶺の爲に、非常な壓迫を加へられ、時には火災の厄に會して衰微したこともあつた。第八世蓮如上人はその英明を以て宗風を一時に興したが、又々叡山の攻撃の爲に終に廟を焼かれて了つた。併し上人は山科に本山を定め(山科御坊)大いに眞宗を全國に布いた。世に中興と稱してゐる。九世實如上人初めて門跡を許されたが、十世證如上人再び日蓮宗徒に山科を焼かれ、本山を大阪石山に移した。十一世顯如上人は織田信長に襲はれ、十一年の間所謂石山合戦を續けたが、終に勅によつて講和した。其後紀州鷲森に移り、次で泉州貝塚、大阪天満と轉々したが、豊臣秀吉が現在の地を寄附したので漸く安定し今に及んだのである。徳川家康は宗教

の力を懼れ、殊に本願寺の勢力を割かんが爲に、顯如の二子、教如、准如を分立させた。教如の流れを東本願寺、准如を西本願寺と稱し初めて兩派の分立となったのである。

堂宇は一度元和年間に焼失したが復興し、建築上見るべきものが多い。

本堂 阿彌陀堂で、東西二十一間餘、南北二十三間餘、棟高十三間餘、内外よく徳川中期の特色(寶曆年間建立)を表してゐる。本尊阿彌陀佛、左右に六祖及聖德太子、法然上人の畫を掲げてある。

御影堂 大師堂ともいふ。東西二十四間餘、南北三十一間餘、棟高十五間の大建物で、眞宗佛堂建築の完全な典型的のもので、手法は凡て徳川初期(寛永年間建立)の風を發揮してゐる。中央厨子は親鸞聖人座像を安置する。世に「骨肉の眞像」と呼んで衆徒の尊信するもの。堂前に有名な「水ぶきの銀杏樹」がある。

唐門 四脚門で左甚五郎作と稱する精妙なる彫刻が欄間を飾つてゐる。日暮門とも唱へてゐる。

書院 桃山期書院造りの代表的建築。中でも鴻之間は對面所とも言ひ、華麗雄大の趣きは實に豊太閤の昔を偲ばせるに十分である。狩野探幽、了慶、及び圓山應舉の繪畫、或は左甚五郎の彫刻等、巨匠の手に成つたものが多く存してゐる。これに隣る白書院は華麗を以て、又更に續く黒書院は閑雅なるを以て、各々當時の名工の逸品を残してゐる。この書院に連つて二つの能舞臺がある。共に従來の様式を破つた特異な形式で、最も優秀な舞臺として天下に知られてゐる。

飛雲閣 滴水園中にある三層の建物で各層各々、永徳、探幽、山樂、元信等の狩野派名工の筆を傳へ、巧妙なる手法をつくした優秀な書院造りである。

黄鶴臺 秀吉の使用した浴場で飛雲閣に隣て在る。以上諸建築物中佛堂以外は、大凡桃山時

代のもので、唐門、玄關、白黒書院等は桃山城の遺物、能舞臺、飛雲閣、黃鶴臺は凡て聚樂第の
を移したものである。什寶又非常に多く、正親町、後奈良兩帝の勅書、趙仲穆筆雪中柳鷺圖、信
長、秀吉等書翰、家康朱印、天正日記、教行信證、大阪籠城記、銅鐘一口等世に知られてゐる。

○

「たゞひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。
その故は自餘の行なほげみて佛になるべかりける身が、念佛を申して地獄にもおちて侍はゞこそ、すかさ
れたてまつりてさいふ後悔もさふらはめ、いづれの行も及び難き身なれば、さても地獄は一定すみかぞか
し。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず……………」(歎異鈔)

私立龍谷大學 本派本願寺の西南にある。同寺の經營で同派末寺の子弟が宗學を研究する所であつたのを、大正十一年大學令による認可をうけて文科大學の組織したのである。

東本願寺

(下京區、京都驛の北四丁に
巍然として聳え立つてゐる)

眞宗大谷派の本山で、正しくは大谷派本願寺といふ。

徳川家康が本願寺の勢力を恐れ、その勢力を殺がん爲に、當時隠居してゐた教如上人(本願寺
を嗣いで居た准如上人の兄)をして今の地に一寺を創立せしめたのが起りである。爾來本派本願
寺と相並んで壯觀を競うてゐるが、不幸にも、天明八年、文政六年、安政五年、元治元年の數回
火災に遭つて焼失し、その度毎に改築した。今の堂宇は明治廿八年落成したものであるが、伽藍
の壯大なるは本派本願寺より優つてゐる。

大師堂(眞影堂) 堂宇中最大宏壯の伽藍である。境内の中央より稍南に寄つた所に東面して立

つてゐる。南北三十五間東西三十二間、棟高二十一間餘、内部の華麗莊嚴は参拜者をしてこの世ながらの淨土に入るの思あらしめる。本尊は宗祖親鸞聖人の木像で聖人自ら刻んだものだといふ。

本堂(阿彌陀堂) 大師堂の南に少し引込んで、矢張り東面して立つてゐる。南北二十六間東西二十一間棟高十五間、大師堂よりは少し劣るが之亦宏壯な伽藍である。本尊は阿彌陀如來。

大師堂門(大門) 大師堂の正面で、烏丸通に面してゐる樓門である。樓上の彫刻天井の天人圖(竹内栖鳳描く)なご之亦莊嚴華麗を極めてゐる。

本堂門 本堂の正面、大門の南にあつて、矢張り烏丸通に面してゐる。

勅使門(菊の門) 大門の北で烏丸通に面した莊嚴華麗な門である。もも桃山城の建築を移したものであつたが、焼失して明治四十四年舊様式に據つて再建した。菊花の紋章のついた門扉だけ

は元のものである。

その他、大寢殿、白書院、黒書院等の建物は、大師堂の北方に立並んでゐる。

涉成園(枳殻邸) (本山の東方二丁で玉水町にある) 寛永年間徳川家光が新屋敷の地を本山に寄附したのへ、桃山城の舊構を移し、石川丈山小堀遠州等に築山泉水を修造せしめた所で、大谷派本願寺法主の別荘である。庭園老樹影暗く池水縁深くして、閑雅なる亭榭その間に隠見し、塵寰を離るゝの思あらしめる。此地は平安時代の初期河原左大臣源融が別業(河原院)を置いた所で、融は邸内に陸奥鹽竈浦の景を模造し、毎日大阪から潮水を取寄せて、鹽を焼かしたりしたと傳へてゐる。

大谷大學 東本願寺の經營にかゝる大學で上京區小山上總町にある。

ケツト一の赤きを被り本願寺
花の雲左は東本願寺

子規
九無

興正寺 (下京區、西本願寺の南隣)

眞宗興正寺派の本山、圓頓山と號す。

文明年間佛光寺第十四世經譽の兄經豪(蓮教上人)が、佛光寺から分れて山科に一寺を創立したのが起りである。その後大阪に移り、天明年間今の地に移つた。徳川時代末期には堂宇壯麗を極めたが明治卅五年焼失し、最近(明治四十四年全く落成)建造したのが今の堂宇である。

本國寺 (下京區、松原通堀川の西南西本願寺の北隣)

日蓮宗、四大本山の一、大光山と號す。

日蓮上人が鎌倉の松葉が谷に創建した寺を興國六年光嚴上皇の勅旨によつてこの地に移したのである。天文五年山徒に悉く焼かれてその後再興し、天明の火事にも一部焼失したが本堂その他は免れて今も猶盛觀が保たれてゐる。

本堂 西面、本尊は日助僧都の書いた法華經である。

祖師堂 本堂の南、本尊は日蓮上人像。

此の外立像堂、羅刹堂、經藏、番神社、清正公祠等の多くの建物が境内に立並んでゐる。

たひと悟なれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たまひ悟あれども信心なきものは誹謗闢提の者なり。(法華題目鈔)

京都東部

東山

北は如意ヶ嶽より起り、京都市の東に起伏して、所謂三十六峰をなし、南の方稻荷山に及んでゐる。最も高き所の清水山でも二百四十二米に過ぎない。すべて形容が温藉で、全山緑樹鬱葱として、四時姿をかへない。月に宜しく、雪の景も亦よく、霞に包まれた眺めも捨てがたい。麓には有名な社寺がならび、公園もあり花街もあつて、市内の名勝の一半はこゝに集つてゐる。いづつても過言ではない。所謂「東山めぐり」はその遊覧をいふのである。

○

ごこ見ても涼し神の灯佛の灯
蒲團着て寝たる姿や東山
春の夜は東山より来るさいふ寺々露し月上る時

子規
風雲
品子

青蓮院

(上京區、粟田口町、知恩院の北)
鴨東線大極殿前停留所南五丁)

天台宗、延暦寺に属す。

開祖は傳教大師。天台座主になられた法親王のお住居になつた所の一で、もみ叡山にあつた。鳥羽天皇の皇子覺快法親王の入室以來、皇族の入寺せらるゝ例となり、維新に及んだ。入室法親王の中伏見天皇の皇子尊圓法親王は書道に堪能なりしより、その書風を慕ふもの多く、之を青蓮院流といふ。和様優美の書風である。徳川時代に上下に行はれた御家流は之より脱化した風である。

歌道に名高き慈鎮(慈園)も此の寺の第三世の住職であつた。

堂宇は應仁兵亂に悉く焼失し、豊臣徳川兩氏を経て漸次舊觀に復したが、明治廿六年再び火災に遇つて寢殿本堂等焼失し、明治廿八年再建した。宸殿(本尊阿彌陀如來)各間の襖繪は狩野派土佐派の名匠の手になり、庭園は相阿彌の築造である。

○

春雨や金箔はげし粟田御所

子規

花園天皇陵

青蓮院の東南に接し道路の東側にある。

粟田口

三條通りの東端蹴上に至る附近一帯の地をいふ。今町名となる。東國北國より京都へ出入する口に當り、刀劍の名工が住んで居たこみや、近世陶器産出の地となつたので名を知られてゐる。粟田口の南に聳えてゐるのが東山の一峰粟田山である。口といふのは諸街道より京都へ這入る入口の舊名である。粟田口の外に鞍馬口、荒神口、丹波口などの名が残つてある。

○

嵐より先埋れて粟田山雪こそ積れ峰の松原

知紀

都人うち眺むらし粟田山あは立つ雲に秋の初風

有功

知恩院

(下京區、鴨山公園の北隣、東山線知恩院前停留所の東)

浄土宗の總本山、山號華頂山。

法然上人(源空)叡山を出で、此地に庵を結び初めて淨土宗を開く(高倉天皇の承安五年)。然るに諸宗に嫉まれて土佐に流され建永二年許されて歸洛した時、天台座主慈鎮より此地にあつた叡山の別院を譲り受けて住房とし、知恩院と稱したのが起りである。上人寂後山徒の爲に堂宇を破毀されたが四條天皇の勅命によりて再興し、爾後朝廷及び武家の尊崇漸く篤く、殊に家康以來徳川氏の歸依深く益々隆盛となり、永享以來數度火災に遭うた事なきは忘れらるゝばかり堂宇完美して今日に至つた。法親王(華頂宮)の入寺せらるゝ例は徳川時代に開かれ維新の時まで續いた。

三門(特別保護建造物) 元和五年徳川秀忠の建立で、靈元天皇の宸筆「華頂山」の額が掲げてある。我國の三門中最も壯大なものである。

本堂(特別保護建造物) 三門を入り石階を登り終るゝ右手に茶所(泰平亭)といふ。大鐵釜は家康の寄附したものが有り、茶所と前庭を隔て、南面して立つてゐる。寛永十年徳川家光の造營したものである。中央に法然上人自作の影像が安置されてゐる。本堂の背後から集會堂及び方丈へ續く約三百間の廻廊は所謂鸞張である。

阿彌陀堂 本堂の西にある宏壯な建物で、本尊は阿彌陀佛。

集會堂 本堂の後(北)にあつて、俗に「千疊敷」といはれる。本尊阿彌陀佛。

大方丈、小方丈(特別保護建造物) 集會堂の東から北に連り立つてゐる。結構は善美を盡したもので、各間の襖の繪は狩野家名人の描いたもので雄大瑰麗よく建物と調和してゐる。

鐘樓 本堂の東南山上にある。鐘は寛永年間の鑄造にかゝる。高さ一丈八尺、徑八尺。方廣寺の鐘よりも遙に大きい。

經藏(特別保護建造物) 本堂前庭の東南部に立つ。秀忠が納めた宋版の一切經を收めてある。

勢至堂(特別保護建造物) 經藏の東北から石階數十級を上つた所にある。足利初期頃の建築だらうといふ。法然上人が慈鎮より寄附された一院は此所にあつたのである。本尊勢至菩薩。

廟 法然上人の廟は勢至堂の北の山の上にある。前に拜殿があり、後に寶形の殿堂があつて、法然上人の舍利塔は此中においてある。

唐門(特別保護建造物) 大方丈前にあるもので寛永十年の建築。

什寶殿 しき中、勅修御傳四十八卷(後伏見天皇の命によつて法印舜昌が法然上人一代の傳記を編輯し、伏見、後伏見、後二條の三帝の宸筆にて詞書が記され、青蓮院尊圓親王外三名が加筆し、土佐光吉が描いたもの)は當院國寶中の隨一である。

智恩院の鐘珍らしや春の風

町中に櫻分け入るや知恩院

關 更

圓山公園

(八阪神社の東一帯、面積 萬六千六百餘坪)

東に山姿優雅綠蔭葱々たる東山を負ひて背景とし、林泉雅麗にして眺望にも富む。公園中央の一老櫻樹は所謂祇園の枝垂櫻である。この地北は知恩院西は八阪神社に隣し、東山の名區を占むるを以て平時杖を曳くもの多く、殊に花時には夜景を見ん爲滿都の士女集り來つて園内は熱鬧の地と化する。

○

艶やかに春の灯ならぶ圓山へ法の灯さもる音羽の山へ

品 子

圓山や毛氈しきて時鳥待つと侍りぬ十四と十五

將軍塚

(圓山公園の東方
華頂山の頂上)

平安奠都の時、桓武天皇命じて、長八尺の土偶を造らしめ、甲冑を着せしめて茲に墳め、王城の鎮護せし遺跡で圓塚がある。近時修築して四周に石垣を築いた。國家に大事變がある時に先だち、この塚が鳴動したといふことが史書に度々記された。之を阪上田村磨の墓だと思ふものがあるが誤りである。田村磨の墓は宇治郡山科村字栗栖野にある。

頼山陽墓

長樂寺の墓地で、圓山公園から將軍塚へ登る途中の左手にある。

八阪神社

(舊稱祇園社)

(下京區、四條通の東端に
ある、石段下停留所の東)

祭神は素盞鳴尊、稻田姫命及尊の御子八柱。官幣大社。

社の起りは齊明天皇の御代にも、清和天皇の御代にもいふ。古來朝廷及び武家の尊崇の厚い社であつた。

本殿(特別保護建造物) 南面、祇園造り(紫宸殿に型さる)、承應二年徳川家綱が改造したもので、壯麗な建物である。

繪馬堂 著名な額が多く掲げられてある。

南樓門(特別保護建造物) 本殿の南方參道にある。足利時代の建築である。

石鳥居(特別保護建造物) 南樓門の南にあつて、高さ六間、開き二丈二尺五寸、柱廻り一丈、本殿改造と同時に建替えられた。

蛭子社(特別保護建造物) 境内に攝社、末社が多くある内、西樓門から入つて南側にある北向の蛭子社は之である。

本社(蛭子社)の祭では白朮祭と祇園會が名高い。

白朮祭は十二月卅一日夕刻より翌年一月元朝にかけて、本殿前で白朮火を焚き參詣人に火を頒つた神事である。參詣人は火繩に白朮の火を移し携へ歸つて元朝の雑煮の炊火にするのである。

祇園會は七月十二日に始まつて廿四日に終る。十七日の神輿の渡御、十七日及び廿四日の山鉾の行列は華やかで神々しい。

八坂神社附近の地を俗に祇園といふ。祇園社の傍だからいふのであるが確かな範圍が定つてゐるのではない。

○

祇園のみしあらひの夕より咲くや涼みの床夏の花

祇園のかみのみ鉢の背まはり人さへ山をなしてけるかな

祇園會や錦の上に京の月

祇園會の見ならび行く日傘かな

衣更へて祇園に賽す白拍子

知 紀
忠 秋
子 規
四 明
菰 子
堂 子

雙林寺

(下京區、團山公園の南
接地、眞葛原の東北隅)

天台宗、山號金王山。

京都 東部

延暦年間傳教大師の開基で、後叡山の別院となり、朝廷の尊信をうけて皇子、皇女の住職なられたこともあつた。西行法師、平康頼、頼阿法師の庵室を營んだもこの境内であつた。南北朝頃より時宗こなつてゐたが明治になつて元の天台宗に復つた。

本堂 南面、本尊は薬師如来。本堂の傍に西行、康頼、頼阿の墓石が並んでゐる。

西行庵 西行庵境内入口の南側にある。西行頼阿の住んだ庵の舊地である。

願はくは花のももにて春死なんそのきさらぎの望月の頃 西行

東大谷 (下京區、高臺 寺の北二丁)

正しくは大谷別院といふ。大谷派本願寺(東)に屬する祖廟で寛文十年の創立である。

本堂 南面、本尊阿彌陀佛。

見真大師の廟 本堂東方の山腹にある。五間に三間餘の墓塋で花崗岩で疊み虎石が上に置いてある。

高臺寺 (下京區、八阪の塔の北、東山 線安井門前停留所北二丁半)

臨濟宗建仁寺派、山號鷲峰山。

慶長十一年豊臣秀吉の室北政所(高臺院)が亡夫追福の爲に創建した寺である。豊臣氏滅亡の後徳川氏は高臺院の歡心を買はんが爲に費用を投じて伽藍の建立を助け、元和八年竣成した。關つて輪奐の美は人目を驚かせる程であつた。惜しいかなしばしば火災に遭つて本堂、釋迦堂等が焼

失し、開山堂、靈屋、唐門等を残したが、今尚舊觀に復するに至らない。今ある本堂、方丈等は最近の再建で假殿である。

唐門 秀吉が征韓に用ひた艦材で造つたもので方丈の前にある。

開山堂(特別保護建造物) 方丈の東にあつて、當寺の開山三江和尚の像を安置する。慶長十年の建築で、裝飾頗る華麗で桃山時代の特徵をよく表してゐる。

靈屋(特別保護建造物) 開山堂の東で十數間の石階を登つた所にある。開山堂と同時の建築で本堂には随求菩薩を安置し、その左右に秀吉、北政所の座像を置く。内部の裝飾は古雅優麗で之も桃山時代の趣をよく表してゐる。厨子の扉の蒔繪は所謂「高臺寺蒔繪」の好標本である。

金亭、時雨亭 二亭は靈屋の上方にある。もこ伏見桃山城中にあつたのを移したので、眺望に富んでゐる。

萩 當寺の境内には萩が多い。秋 酣なる頃になると、白露を翻さぬうねりを眺める爲、京洛の士女が集り來つて、茲にも高臺寺蒔繪の如き麗しい光景を現出する。

古くさき梅のまき繪や高臺寺 嵐 山
鶯や森深うして高臺寺 碧梧桐

靈 山 (下京區、清水寺の北高臺寺の東、南、東山線松原停留所東七町)

東山三十六峰中栗田山以南の一高峰(標高一五〇米)であつて、京都市内を一望の中に收める好風景の所である。

正法寺 靈山の頂に近い所にある時宗の寺で、延暦年間傳教大師の開基に係り、初は天台宗

であつた。室町時代の初頃は盛大であつたが、漸次衰微し、明治年間火災に罹つてから非常に荒廢して、今釋迦堂が一字存するだけである。

正法寺の境内に隣つて招魂場があり、維新の際國事に斃れた人々を祀る爲明治九年に建設した。

靈山の頂の邊りには木戸孝允の墓や、維新前後の勤王志士の墓碑が多くある。

天遠く月靈山を上りけり

露石

建仁寺

(下京區、四條線、
手停留所南三丁餘)

臨濟宗建仁寺派の本山、

榮西禪師宋より歸朝して初めて我國に禪宗を傳へた。建仁年間源頼家篤く歸依して此地に京都最初の禪寺を創立し師を迎へて開山した。土御門天皇建仁の寺號を賜はり、公家武家の信仰するもの多く、寺運漸次隆盛に赴いた。室町時代には京都五山の第三位の寺格を保ち、文學に秀でた高僧の輩出したので名高い。その後屢々火災に遭ひ、豊臣氏の頃尤も衰微したが、次第に再興して今尙洛東屈指の大禪刹である。

佛殿 中央にあり南面して居る。本尊釋迦佛。延享年間の再建である。

方丈(特別保護建造物) 佛殿の北にあり。文祿年間安藝の國安國寺の方丈を移したもので室町時代末期の様式である。

勅使門(特別保護建造物) 南方にある。鎌倉時代に六波羅の平重盛の第門を移したものだ。

傳へられてゐる。扉に鏤の痕があつて、俗に「矢の根門」といふ。

興禪護國院 佛殿の東北にある。千光國師(榮西)の廟であつて、其の像を安置し、後土御門天皇御宸筆の額が掲げてある。院内に二株の菩提樹があつて國師が宋より將來したものだとい傳へられてゐる。

安國寺惠瓊の首塚 方丈の北の林中にある。

六波羅密寺

(下京區松原通大和路東、東山)
(線「東山松原」停留所の西三丁)

眞言宗、智積院に屬す。山號普陀洛山。

村上天皇の天曆年間疫病流行の爲、京畿の地死屍累々として途に横はるの慘狀を呈した。空也

上人^上之^を憐^み自^ら十一^面觀^世音^の像^を刻^み、洛^中を牽^き巡^つて、病^者の爲^に祈^念して平^癒せしめた。疫病^止むに及^んで一^寺を創^立してその觀^世音^を本^尊としたのがこの寺^{である}。

本^堂(特別保護建造物) この寺^昔は規^模壯^大であつたが、幾^多の變^遷があつて、今^本堂^{のみ}が残^つてゐる。貞^治二年^の古^建築^物で、その樣^式裝^飾等^が室^町時^代初^期建^築の典^型とい^うてよい。

西^國卅^三番^札所^の第^十七^番こ^なつてゐる。
六^波羅 六^波羅^密寺^{より}七^條通^{りの}邊^までの古^名、六^波羅^密寺^の名^に因^んで起^つた稱^{。平}氏^の一族^郎黨^の邸^宅二^千二^百餘^のあつた所^で、鎌^倉時^代には探^題府^が南^北の二^箇所^{にあ}つた。

○

重^くも五^つの罪^はよもあ^らじ六^はら堂^に參^る身^なれば (順^禮歌)

百^年を六^度重^れし六^波羅^の夢^驚かす鐘^の音^{かな}

八阪の塔

(下京區八阪上町、東山線安井停留所の東北)

靈光山法觀寺(聖德太子の創立)の塔である。禪宗臨濟派建仁寺末。法觀寺は太秦の廣隆寺及六角堂等と共に平安京邊の最古の寺であつて、平安時代半頃迄は境内も廣く堂宇も壯麗であつたが漸次衰微し、堂宇も度々の火災に焼亡し、今この塔は永享十二年足利義教が再興し元和四年京都所司代板倉勝重大修理を加へたものである。今はこの塔を本堂と稱し本尊五智如來を安置してある。(特別保護建造物)

○

十餘人縁にならび春の月八阪の塔の廂離るる

品子

ほととぎす京は八阪の御塔を南に過ぎぬ有明の月

重三

清水寺

(下京區清水町、東山線五條より登るのが五條坂、同松原より登るのが清水坂、各七町)

法相宗で興福寺に屬してゐる。山號音羽山。

阪上田村麻呂の建立で、もも木津川附近にあつたのを、延暦京都の時に此處へ移した。後朝廷の崇敬を蒙り漸次盛大に趣いたが、延暦寺との争の爲に建物悉く兵火に罹つた。現在の伽藍は寛永十年徳川家光の再建である。境内は東山の中の音羽山の山腹(標高一一五米、五條橋邊は三五米)を占め、地勢雄偉、市中を一望の下に集むる形勝の地で、春花秋葉、四季折々の眺めに富んでゐる。

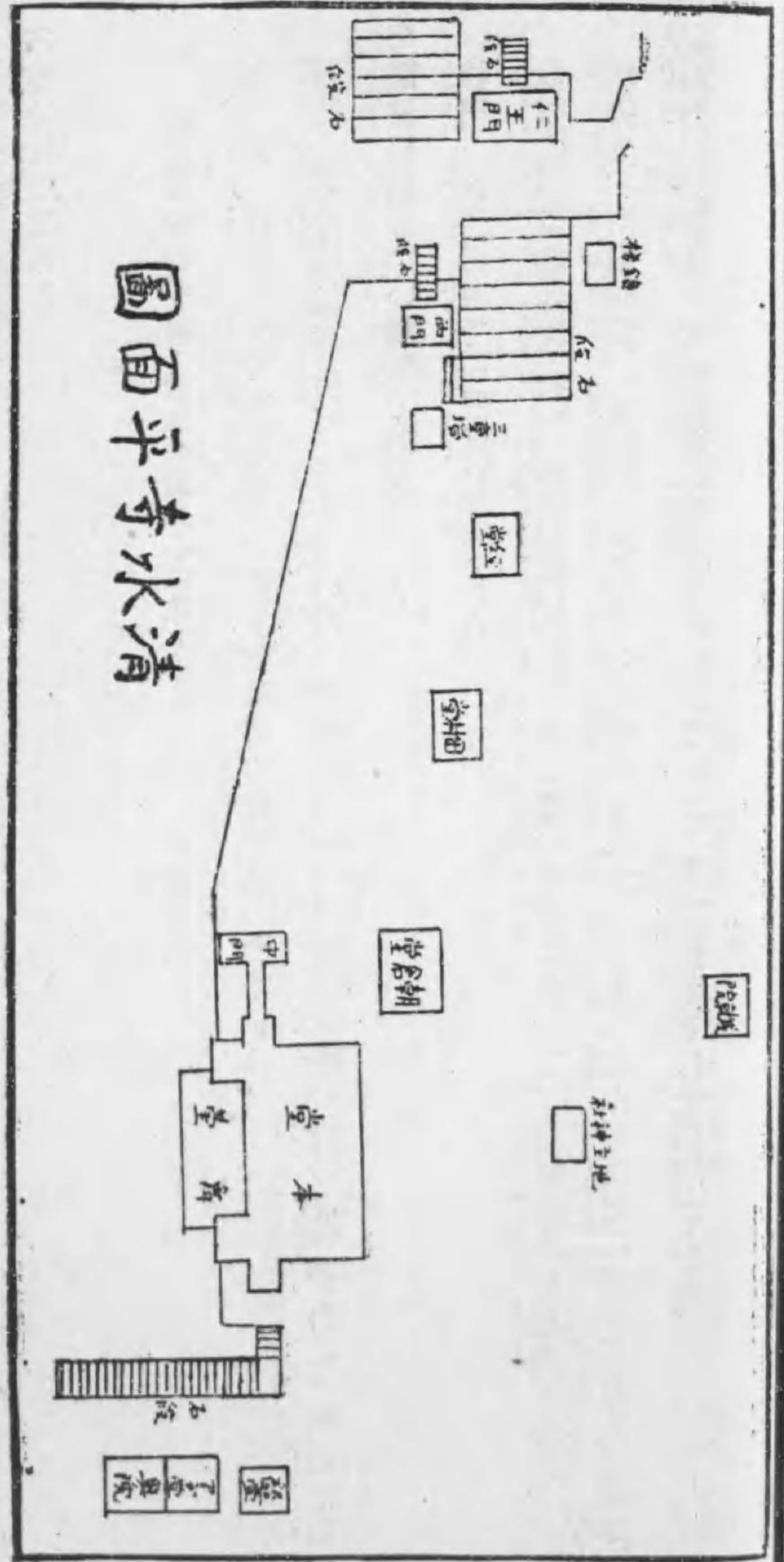
清水の坂から戻る燕かな
清水の坂のぼり行く日傘かな

馬衣
子規

本堂(特別保護建造物) 南面、九間に七間、四注造り檜皮葺、東西に裳階があり、前面に兩翼を添へ、堂前に所謂清水の舞臺が數丈の懸崖に臨んで張出してゐる。全體の格好が如何にも莊嚴優雅である。本尊の十一面千手觀音は延鎮の作で國寶、堂内の梁に掲げられた額には珍らしいものも多く、その中渡海船を描いた四枚が國寶となつてゐる。

三重塔(特別保護建造物)は本堂の西にある。田村麻呂の建立で、妹全子女御の安産の記念だといふので世に子安塔といふ。

經堂 本堂の三重塔との間で稍北に寄つてゐる。本尊は觀世音菩薩で、西國卅三番の中第十



清水寺平面圖

六番の札所である。

松風や音羽の瀧は清水の結ぶ心は涼しがるらん (順禮歌)

田村堂 經堂の東で本堂の西・創立當時の本堂であつたといふ。

西門(特別保護建造物) 三重塔の西、建長十二年の建造で輕快華麗の趣がある。門前は市中

の眺望に最もよい場所である。

樓門 西門の西で一段低い所にある。

鐘樓(特別保護建造物) 西門樓門の間で北に寄つた所にあつて、華麗雄大な建物である。

釋迦堂、阿彌陀堂、奥院 本堂の東の懸崖の上に北から南へ並んで西面に建つてゐる。奥院は

田村麻呂が歸依した僧延鎮の住所であつたといふ。奥院前崖下に音羽瀧がある。

地主神社 本堂の北にあつて小高く、素盞鳴尊外四神を祀る。社邊に櫻が多く、俗に「地主の櫻」を稱す。

成就院 地主神社の西北にあつて、清水寺住職の住所である。維新の頃國事に奔走し終に薩摩の海に入水した僧月照上人はこの住職であつた。その墓はこの門前にある。

清閑寺 清水寺の東南、約四丁の山中にある。山號を「歌の中山」といふ。眞言宗。本尊千手

觀音、菅公の作を稱す。境内に高倉天皇陵、六條天皇陵があり、小督局の葬所(御陵の東方)には小塔が立つてゐる。嵯峨にある小督の墓はその住所のあとであらうといふ。

濁なき心をさへも洗ふめり清水寺の鐘のひびきに

京都東部

世の人の心々にむすぶらん三筋におつる清水のたき
京の子が日傘たゝんでしゃんなりと青葉美し清水上る
初旅の京のみやげと陶器の塔など買ひぬ清水阪に

直好

初子

八〇

題三清水寺閣雨景

頼山陽

花外水聲加ハリ 欄頭雨點集マル 及ニ他羅綺散ニ 靜看胭脂濕ニ

紅葉ちつて竹の中なる清閑寺

閑更

鳥部山

(下京區、東山線五條坂停留所より東ノ四餘)

平安時代より火葬地埋葬地として名高い所、昔は阿彌陀峰の南の邊まで鳥部山又は鳥部野と言つた。豊國神社が創建せられたとき火葬所は取拂はれたが、今尙墓地として用ゐられてゐる。各種の墓石が累々として山腹に連なり。その中に古來の名家の墓が多く交つてゐる。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立去らでのみ住みはつるならひならばいかにもの、哀れもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。(徒然草)

あしたには陽炎立ちぬ鳥部山

大江丸

春風のこゝも吹くなり鳥部山

重厚

京都東部

西 大 谷

(下京區、五條橋通東突當
り東山線五條坂停留所前)

正しくは大谷本廟といふ。本派本願寺(西)に屬す。眞宗の開祖親鸞上人埋骨の地である。はじめ上人の遺骸を鳥部野で火葬に附し大谷に納めた。その地は今知恩院山門の北崇泰院の地である。爾後二百餘年間本廟は此處にあつたが、元龜年間織田氏との間に難起るや、一度靈骨を粟田口に移し、秀吉の時再び舊地に復つたが、徳川氏知恩院を造營するに當つて、現在の地に移轉せしめた。「大谷」の稱は舊名を用ひたのである。

本廟 東面して正門を入るに本堂(本尊阿彌陀佛)がある。本廟は本堂の後(東)にある。顯如上人以下歴世の墳墓は、左右の石垣の内にある。親鸞上人の火葬所は一丁程東の山間にあつて石碑が立てゝある。

養 源 院

(下京區、卅三間堂と
向ひ合つて東にある)

天台宗 本尊阿彌陀佛

豊臣秀頼の生母淀君がその父淺井長政(法名養源院)の追福の爲に創立した寺で、間もなく火災に遭つたが、淀君の妹なる徳川秀忠夫人が再興した。建築材料に伏見桃山城の遺物を用ひた。方丈縁側の天井は慶長五年鳥居元忠等が關ヶ原戦争の時大阪方に圍まれて自刃した所の伏見城の床板がそのまゝ用ひてあつて、血痕斑々として當時を偲ばしめる。「血天井」といふのは之である。襖に狩野山樂、同永徳、依屋宗達の繪があり、林泉も美しいので知られてゐる。

妙法院

(下京區、東山線妙法院停留所の東側)

天台宗 天台座主門跡の一で、維新以前は皇族の入寺せらるゝが例であつた。本尊普賢菩薩。元叡山にあつたのを、後白河法皇が京都綾小路に移され、豊臣秀頼の時大佛殿を管理する爲今の處へ移轉した。

大書院は東福門院の舊殿を賜はつたもので、庫裡は豊臣秀吉の創建で、立關と共に特別保護建造物である。文久三年三條實美等の七卿が京都を脱して長州に奔りし際には此寺に會して相談つたといふ。庭園は小堀遠州の意匠によつたもので自然の趣を得て居り、什寶としては豊臣秀吉の遺品が多い。

智積院

(下京區、妙法院の南西面)

眞言宗新義派の總本山。山號一乘山、本尊は不動明王。

元紀州の根來にあつたが、天正十三年豊臣秀吉に焼拂はれ、後徳川家康の歸依を受けて、この地に再興するこゝになり、元和五年には秀吉が愛子捨君追福の爲に建てた祥雲禪寺を譲り受けた。今の堂宇は大體それである。捨君は秀頼の兄で、三歳の時伏見城中の池で溺死した。

方廣寺

(下京區、豊國神社の北隣)

俗に「大佛」で通つてゐる。天台宗、妙法院に屬す。

豊臣秀吉が奈良の大佛に倣つて、天正十四年にこの地に大佛殿を建てたのが起りで、木造の大佛の高さ六丈三尺、佛殿は高さ廿五間もあつて、境内も廣く結構壯麗であつたが、慶長元年の地震で倒れたので、秀頼が再建し、大佛を金銅像とした。所が國家安康の鐘銘の句なごの爲、徳川家康との戦争となり、豊臣氏が滅びた後、妙法院の附屬になつた。大佛は寛文二年の地震で壊れたのを徳川氏が銅錢に鑄かへした。そして改めて木像にしたが、寛政十年雷火の爲に山門堂宇と共に焼亡した。今ある半身像は天保年中に造られたもので、本堂は寛政焼失後に建てられたものである。方廣寺の遺物として名高いのは、大佛殿の傍にある洪鐘で(高さ一丈四尺、徑九尺二寸)慶長十九年秀頼再建の時鑄たものである。「國家安康」の文字が今尙あり、見えてゐる。但し鐘樓は明治十七年の建立で位置も變つてゐる。

耳塚 豊國神社の門前一段低い所にあつて高さ三間餘りの塚である。朝鮮征伐の時討取つた敵

兵の鼻と耳を斬取つて、首實験の代りに送つて來たのを、供養の爲に埋めて築いたのである。上に高さ二丈餘りの石造の五輪塔が立て、ある。この五輪塔は阿彌陀峰の豊公廟堂修築の時、置いたのである。

○
秋の風 京の大佛鳩ばかり 大江丸
耳塚の上に啼きけり子規 鳴三

豊國神社

(下京區七條線大和路停 留所北三丁博物館の北隣)

豊臣秀吉を祀る。別格官幣社。

慶長三年八月秀吉薨するや、阿彌陀峯に葬り、西麓に神社を立てた。地域卅萬坪、結構壯麗。

善美を盡くしたものであつた。豊臣氏滅亡後徳川氏は神社を破毀し、墳墓亦荒廢に委せて顧みられ
なんだが、明治元年再興の命あり、大佛殿を北隣に移轉せしめて社殿を營み、同十三年落成した
のが今の神社である。

唐門(特別保護建造物) 正門で西面してゐる。桃山城の城門を移したものと傳へられ、西本願
寺の唐門ミ形式を同じうした豪壯の建物である。

豊臣秀吉の墓

(下京區、博物
館の東方山上)

阿彌陀峰の頂にある。秀吉薨去の翌年(慶長四年)に茲へ葬つた。妙法院前停留所から東にだ
ら／＼登るに約一町ほこで一の鳥居があり、續いて二の鳥居、それを入るに拜殿があり、その

背後から六百六十餘級の石階を登つた上が豊公の廟堂である。周圍に十間四方の石の玉垣を廻ら
し、中央に花崗石の大五輪塔(三丈一尺餘)が立つてゐる。之が秀吉の墳である。實に堂々として
ゐる。この石段及び五輪塔は明治卅年有志が墓域を修理した時建造したものである。

阿彌陀峰は標高一九三米、秀吉の墓から遠望するに南は伏見、西は淀、山崎、八幡より大和
の葛城、金剛の山々までを一望の下に集め、眺望廣豁實に一幅の活畫圖である。

○

秋風に雲の迷も消えはて、あみだが峯を出づる月影

亭 壽

世に越えて立てるあみだの峯なれやいと疾く春の色に霞める

蘆 庵

新日吉神社 阿彌陀峰の參道の右手にある。後白河法皇が近江阪本の日吉神社を勸請せられた
ので、地域も廣かつたが慶長年間豊國廟を創建するにき一度取拂はれ、後今の所に再建された。

京都恩賜博物館

(下京區、豊國神社の南隣、妙法院停留所はその裏門の所)

東京、奈良の博物館と共に帝室の御有であつたが、大正十三年京都市へ下賜された。本館は明治廿八年に竣工した洛東の宏壯なる洋風の建築である。京都及び附近社寺舊家等の什寶を安全に受託保管し、同時に一般公衆をして觀覽研究せしむるの目的で設けられたものである。

三十三間堂

(下京區七條線大和大路停留所南)

天台宗妙法院に屬す。正しくは蓮華王院といふ。

此地は後白河法皇の御所法住寺殿の西北部で、法皇が長寛二年に造營して妙法院に賜はつたも

のである。建長元年火災に遭つたが、同三年(約六百七十年前)再建に着手し文永三年に落成したのが今の堂である。堂は東面し、南北に長く六十六間あるが、古は柱と柱の間を一間と數へて卅三間堂といつたのである。藤原時代末期の特徴を有する優美な建築で、南大門と共に特別保護建造物となつてゐる。堂内は中央が佛壇で所謂一千一體の千手觀世音像が安置してある。中尊の千手觀音像は湛慶の作、廿八部衆、風神、雷神は運慶作と云ふ。堂の西裏で行はれた大矢數といふ射式は源平時代に起り徳川時代に盛行して遂に江戸でも眞似するに至り卅三間堂の名と共に天下に名高かつた。

○

蚊柱ヤ 三十三間堂

京は五月三十三間堂の雨

京都東部

古白

牛伴

後白川天皇陵 卅三間堂の東にある。

法住寺殿の址

北は七條通り、西は大和大路にて限り東は阿彌陀峰の麓に及ぶ南北五町の地。

一條天皇の御代藤原爲光がこゝに法住寺を營み、後鳥羽天皇後白河天皇の離宮となり、木曾義仲に焼かれた。源頼朝が修造したが、その後廢滅した。後白河天皇は此處で崩御なされたのである。

○
「我は元より草木の、歸る古菓の柳は今、伐崩されて枯柳、歸るといふは消ゆみ身に何ぞて形を残すべき。白河の法皇の御惱顔とて、都の使來りつゝ、我身を伐捨て申すなり。かくて姿は見えながら最早朽木も時を得て、一字の棟なる事も、一つは妙なる法の縁、逢ふ事の稀にうごんげの花物いはぬ草も木も、王土に住めば是非もなし。……」(卅三間堂棟由来)

京都東北部

熊野神社

(京都市上京區聖護院町、熊野神社前停留所の北側)

祭神は伊弉諾尊、伊弉册尊、天照大神速玉男命、事解男命の五柱。

後白河上皇が紀州熊野權現を勸請し京都守護神の一とせられたのだと傳へてゐる。はじめは地域も廣く社殿も宏壯を極めて居たが、應仁の亂に兵火で焼失し、寛文天保の兩度に再興し、稍舊觀に復したけれど、地域は古の十分の一にも及ばぬといふ。

熊野神社と鴨河間の間の邊は保元の亂に戰場となつた白河北殿の址で、熊野神社より東南岡崎

公園動物園に至る間の邊は白河殿、六勝寺などの址に當つてゐる。

聖護院 熊野神社の東北二町にある。天台宗に屬し本山派の修驗道の本山である。天明嘉永兩

度の皇居炎上の際には光格、孝明天皇の假皇居となつた。

平安神宮

(上京區岡崎町、岡崎公園北部)
(鴨東線大極殿前停留所北二丁)

桓武天皇を祀る。官幣大社。

明治廿八年京都市に於て奠都千百年祭を行ふに當り、神宮建設の許可を受け、宮内省より御下賜金を賜はりて造營したものである。

參道を北すれば正面に二層の樓門(桁行六十尺梁間は四尺高さ六十四尺)が巍然として立つてゐる。

之は往古の應天門に模したもので、全部丹朱を塗り屋根は碧瓦で葺いてある。門内卅間の奥に龍尾壇があり、その奥廿五間にして、拜殿(桁行五十尺梁間四十尺高さ五十五尺)が土壇の上に立つ。(高さ五尺東西百廿八尺南北五十八尺)之は往古の大極殿を模したもので、全部丹朱を塗り碧瓦を葺く。左右に歩廊があり、東西各七十尺にして南に折れ延びるこゝに九十尺、終端に各高樓が立つてゐる。東のを蒼龍、西のを白虎といふ。應天門大極殿共に往古の二分の一だといふが宏壯尊嚴遙に東山の蒼翠と相映じて偉觀をなしてゐる。本殿は拜殿の奥(北)にあり。破風造檜皮葺である。本殿背後の神苑は櫻の名所として知られてゐる。四月十五日が例祭であるが、十月廿二日の時代祭には、鳳輦市中を渡御する御供に時代行列が加はるので、この方が名高くなつてゐる。その行列は左の通りである。

山國隊、弓箭隊、徳川上使上洛式、織田公上洛式、城南流鏑馬式、藤原文官參朝式、延暦武官出陣式、延

曆文官參朝式、前列、神饌講社、鳳葦

大極殿 萩に簪影衣香かな

椽面坊

○ 岡崎公園(上京區岡崎町の南部) 岡崎町は神樂岡の南に當り、北は吉田町淨土寺町、東は鹿ヶ谷町南禪寺町に接し、南は白川、疏水を隔て、粟田口と連なる。公園は林泉の風致には乏しいが、地域廣濶(二萬五千餘坪)で、東には如意嶽の秀峰を仰ぎ、南は粟田山の翠巒を望み、中央に平安神宮鎮座ましまし、武徳殿、市公會堂、勸業館、商品陳列所、府立圖書館等の宏壯な建物があちこちに立並び、動物園、運動場もあつて、遊覽の士女の出入絶間がない、美術展覽會、博覽會等は、大抵勸業館内で開かれる。

妹と出でて若菜摘みにし岡崎の垣根戀しき春雨を降る

景 樹

岡崎の大極殿の屋根わたる朝鳥見て茄子を摘む家

品 子

○ 岡崎の地は近世歌道の名家の住居したるこゝが多く、それは小澤蘆庵、香川景樹、梅月堂、澄月、慈延、木下幸文、玄如、蓮月尼等の人々である。

岡崎の月見に來ませ都人かごの畑芋煮てまつりなん

蓮 月 尼

夕月夜粟田の山は霧こめて鹿の音遠し岡崎の里

幸 文

武 徳 殿 (平安神宮の西隣)

平安寛都の初め大内裡の内に武徳殿を營み、武技を奨勵せられた故事に因んで平安神宮造營の

時設けられたもので、大日本武徳會本部を茲におき、殿内は演武場に當てられてゐる。毎年五月四日平安神宮に於て武徳祭を執行し、同時に全國の武術家を會して、此處で仕合をなさしめ、斯道の發達を圖るこゝになつてゐる。全國青年の演武大會は例年八月之を行ふ。

動物園

(上京區、岡崎町鴨東線動物園前
停留所の北、岡崎公園の東南部)

明治卅三年今上陛下御慶事記念として京都市の開設したものである。園内は世界各國産の鳥獸虫魚の屬が飼育せらるゝのみならず、丘池林泉の風致も宜しく、殊に櫻樹多き、地の疏水に沿へるミを以て、花盛り盛夏の候には、花見及び納涼の適地として市内の一名勝に數へられてゐる。

動物園附近一帯の地は古白河法皇の創建せられた法勝寺の地に當つてゐる。

白川 動物園の東南隅の所で疏水運河に合してゐる。源は白川村の山中で、淨土寺町、鹿ヶ谷町を西南に流れて、こゝで一度疏水に入り、二度疏水に分れて、西南に流れ、四條橋の上手で鴨川へ落ちる。この川があつた爲に元は鴨川以東を「白川」といつたものだ。

もえわたる底の水草もあらはれて煙流る、白川の水

知 紀

芹つむと出でて來たれば鶯の初音きこゆる白川の里

幸 文

白河の末の草河冬がれて細き流に千鳥啼くなり

景 樹

市公會堂

(上京區岡崎町岡崎公園内、東山線二條停留所の東二丁北側)

大正四年今上陛下御即位の禮を行はせ給うた後その大饗宴場を京都市へ下賜せられたので、市は大禮記念事業として建築し、同六年竣工した。構造は大饗宴場の音楽殿に兩袖に二階建を配置したのである。建坪は七百二坪、工費十三萬五千餘圓を要した。内部の裝飾は絢爛にして高雅、市の公會堂として實にふさはしい建築である。

商品陳列所

平安神宮の南、府立圖書館を道を隔て、相對してゐる。日露戰役記念事業として、明治四十二

年設立し、市内の生産にかゝる物産商品を陳列し、無料で觀覽せしめる。

疏水

琵琶湖の水を京都へ引くの計畫のあつたのは古いことである。古くは平清盛降つて豊臣秀吉なども計畫をしたといふ。江戸時代にも明治の初年にも計畫はあつたがいづれも實行されなかつた。それが實行されたのは明治十四年京都府知事北垣國道の計畫により、設計は工學博士田邊朔郎に成つたのである。起工は明治十八年八月である。明治廿三年四月幹線略落成して、明治天皇の臨幸を仰ぎ盛なる竣工式を挙げた。支線及び伏見運河の全く落成したのは同廿七年八月で工費總額二百萬圓を要した。その目的は交通運輸の便を圖り、水力の利用によつて工業の原動力を得、

且上水道の水源を爲さんが爲である。

起點は大津市三井寺前で、長等山を穿つ、こゝに一千三百四十間、御陵山を抜く、こゝに六十八間、日の岡峠を貫ぬく、こゝに四百六十八間、この三隧道を経て蹴上に至り、水の一部は市中に落されて、市營水力發電所の原動力に用ひられ、流末は運河となり岡崎公園の南より西を経て更に西流し、丸太橋夷川橋の中央邊にて南折し鴨川と相並びてその東岸を流れ、七條の南にて鴨川と離れて尙南流し、伏見町を経て宇治川に合する。運河總延長七里十一町餘に及ぶ。その間インクラインを設くる、こゝに二箇所、水門を設くる、こゝに數箇所、琵琶湖と宇治川との間の水運連絡を計つてある。インクラインの一是蹴上より動物園東南角に至るまで三百廿間(勾配十五分の一)その二は伏見町の北部にあつて百六十間(勾配十分の一)である。

疏水の水の一部は南禪寺の境内を貫いて北流し、淨土寺町、田中町を経て高野川を横切り下鴨

の北部を西流して鴨川を横切り、漸く南に折れて到る所、灌漑用に供せられ、末は市中に入り堀川に合する。

以上第一疏水であるが第二疏水は明治四十一年十月起工同四十五年六月竣工した。その工費は總額約二千萬圓。水路は大津市三井寺下第一疏水の北から始まり、之を併行して長等山(一千四百七十一間)山科村の柳山(三百五十八間)安祥寺山(四百七間)黒岩山(百廿一間)日岡峠(四百九十九間)の五隧道を経て、蹴上に出で第一疏水に合する。

蹴上發電所

蹴上に來りて合流する第一第二疏水の水は、大日山腹に穿てる隧道をぬけて瀦水池に入り、池

の北端に設けてある開門から二條の水壓管に流れ込み、蹴上発電所内に流下して、発電用の水車を回轉せしめ、四千八百キロワットの特別高壓電流を起す。市電鴨東線蹴上終點の西方低地に立てる赤煉瓦の建築物中に晝夜轟々の響きをきくは即ちこの発電所の活動してゐるのである。電流の二分の一は地中電線によつて市内二箇所の變電所に送り、變電所にて電壓を變じて市内の需要に宛て、その二分の一は此處にて變壓し架空線によりて市内及附近の郡村に配送せられる。発電用をなした水は排水隧道をぬけ、南禪寺通の地下を通り船溜に入つて運河の水となるのである。

水道淨水地

(華頂山の背
部にある)

京都市水道の源泉總面積は一萬四千四百餘坪あつて、内に沈澱池、濾過場、高區配水地、低區

配水地、計量室、事務室等が設けられてある。沈澱池は面積二五、五二五平方尺、配水地は高區のも低區のも同大で、面積は二、四一七平方尺、濾過装置は自然流下式濾過法である。

第二疏水から導かれた水は自然流下法によつて沈澱池に入る。濾過場を経て清淨なつた水は一部は自然流下で低區配水池に入り、一部は唧筒の働きによつて高區配水池に揚げられ、いづれも、計量室を経て、數條の鐵管で市内各所に配給される。

域内に躑躅が多く花の盛りには一般の縦覽を許す例である。

南 禪 寺

(鴨東線南禪寺前停
留所より東二丁)

臨濟宗南禪寺派の本山、山號瑞龍山。

弘安年間龜山上皇此の地に離宮を營み、尋で傍に一禪寺を建立せられ大明國師を開基せられたのがこの寺の起りで、後離宮の全部を寺に譲られた。南北朝以後朝廷の尊信篤く、後小松天皇は當寺を京都五山の首位に置かれ、尋で五山の上に立つこころなり寺運隆盛を極めたが、山徒の嫉みで焼拂はれ、應仁の亂にも亦炎上した。豊臣徳川兩氏再興に參し、漸く舊觀に復するこころなつた。

三門(特別保護建造物)南禪寺前停留所よりインクラインの上の橋を渡つて東に二丁程行く中門があり、中門の北に唐門(勅使門)もいひ、明正天皇の時御所の日華門を賜つて建てたものがある。唐門の後(東)に三門がある。藤堂高虎の再興したもので、室町時代の様式で造られ、規模宏大、知恩院の三門と並んで徳川時代建設三門の雄である。

佛殿(本堂) 三門の後にある。本尊釋迦如來。慶長十一年豊臣秀頼が造營したのであつたが明

治廿八年焼失して再興したのである。

大方丈(特別保護建造物) 佛殿の後にある。慶長十六年後陽成天皇より清涼殿を賜はつたものである。襖繪は狩野元信、同永徳、同山樂等の筆である。

小方丈(特別保護建造物) 徳川氏が伏見桃山城建物の一部を寄附されたもので、桃山時代建物の豪華の趣を表してゐる。

南禪院は龜山上皇御座所の遺跡である。

金地院 中門に至る道の右手にある。南禪寺の子院で、客殿は桃山城の遺材を用ひて建築した崇傳(本光國師)の出たので名高い。

南禪寺の境域は市内の雑沓を離れ松樹翁爵にして、幽邃閑寂、特殊の趣に富んでゐる。

萩枯れて山門高し南禪寺

虚子

鹿ヶ谷

(上京區淨土寺町、山麓の地
名で今町名となつてゐる)

治承の初め、俊寛僧都、藤原成親、平康頼等の平家討滅の謀を廻した所、鹿ヶ谷町の東方の山に登るこゝ約十町に今「談合谷」と稱する所があつて、二段の平地を存し、俊寛の山莊の跡だこ傳へてゐる。

永觀堂

(上京區南禪寺町
南禪寺の北二丁)

淨土宗西山派の總本山。寺名正しくは禪林寺。山號は聖衆來迎山といふ。

清和天皇の勅により、弘法大師の弟子眞紹僧都が開創した寺で、眞言宗であつたが、承暦年中永觀律師が中興して永觀堂と稱するこゝになり、高倉天皇の時淨土宗となつた。龜山天皇離宮を此の寺の南方に營み、後捨て、南禪寺とせらるゝに及び、寺域を割いたので縮少した。

本堂 西面、本尊は「見返りの阿彌陀如来」。

御影堂は本堂の北にあつて淨土宗祖師の像を安置してある。方丈(釋迦堂)は又その北にある。その他尙二三の堂舎がある。

境内は山に倚り池を穿ちて楓樹が多く、洛東紅葉の名所の一に數へられてゐる。

若王子神社

(上京區若王子町、永觀堂の北二丁
南禪寺前停留所より東北十丁)

祭神は天照大神、國常立尊、伊弉那岐尊、伊弉那美尊。

後白河法皇、永暦年間の創建で紀伊の熊野権現を分祀したものだ。傳へられてゐる。

東に山を負つて楓樹が多く、洛東紅葉の名所の一に數へられてゐる。東方の山腹に小瀑布があつて、夏時納涼の爲に來るものが多い。

東方山上に基督教徒の墓地があつて、同志社創立者新島襄の墓がある。

北に住蓮山安樂寺(淨土宗本尊阿彌陀佛)があつて、堂前東方の丘上に松虫、鈴虫(後鳥羽天皇の侍女で、法然上人の弟子住蓮、安樂に就いてこの地で出家した)の塔がある。

吉田神社

(上京區、神樂岡の西方、丘腹)
熊野神社前停留所の北約十丁)

祭神 武甕槌命、伊波比主命、天兒屋根命、姫大神。官幣中社。

清和天皇貞觀年中藤原山陰が大和の春日の四社を勸請したもので、一條天皇の永延年間より京都守護の社と崇め官幣を奉ずるやうになつた。藤原道長が法成寺を營むや、この社を以て鎮護した。本社の神職吉田氏(本姓卜部)は一條天皇の時以來社務に補せられ、古來神道家を以て聞えてゐる。境内に齋場所及び八神殿を設けたのは吉田兼俱で御土御門天皇の時の事であつた。その邸址は今齋場の石段前にある。

本殿 古は今の第三高等學校の所にあつたが、天文年中今の所に移つた。社殿は春日造、慶安年間の改造である。

齋場所(特別保護建造物) 本社の北にある。八角造の萱葺で、慶長六年の建造。伊勢兩大神宮はじめ、海内の神祇三千一百廿二座を鎮祭してある。此の齋場所は元大内裏の神祇官に在つたのを吉田家の私邸に移し、文明中此處へ移したのである。毎年節分の夜は數萬の參詣者群集して厄除

京都東北部

けの神符を乞ふので、夥しい雑沓である。八神殿は維新後宮中に移されて、今遺址があるだけである。

一一二

吉田山 古くは神樂岡といつた。南北四町ほごに互る丘陵で、標高百二米餘、全山鬱々たる松樹に包まれてゐる。頂に上れば洛北の全景一眸の中に集つて、眺望頗る佳である。
陽成天皇御陵 は東麓にある。

○ 櫻花折りがざしつ、神樂岡夕越えくれば雉子なくなり
秋風に靡く尾花はかぐら岡きれが起伏す袖かこそ見る

有 功
蘆 庵

京都帝國大學

(上京區吉田、田中の二町に跨る。南は春日通より北は百萬遍の北東に延び、東は吉田山より西は鴨川に及ぶ)

明治卅年設置、現今法醫、文、理、工、經濟、農の七學部を備へて綜合大學をなしてゐる。明治卅年第一回の卒業生を出してから大正九年度末までに五千九百五十六名の卒業生を出し、大正十一年開校廿五周年に當るので盛大な記念式を行つた。

第三高等學校 吉田山の西京都大學の南に路を隔て、相對してゐる。初は大阪にあつたが、明治廿二年八月今の地に移つたのである。

大學の西隣に京都工藝學校があり、その西鴨河に近く市立京都繪畫專門學校がある。

百萬遍

(上京區、田中町京都大學の裏門
前電車出町橋終點より東約八丁)

淨土宗、鎮西派の一本山、山號長徳山。寺名は知恩寺。

京都東北部

一一三

も慈覺大師の創立した賀茂神社の神宮寺で、天台宗に屬し、釋迦堂といひ、今出川（今相國寺のある所）にあつたが、法然上人が念佛道場として淨土宗となり、次いで知恩寺と稱するやうになつた。元弘年間天下疫病流行の際住職善阿上人が勅を奉じ、百萬遍の念佛を唱へて禱つた爲疫病終熄したので後醍醐天皇の歡感深く、「百萬遍」の號を賜はつたといふ。爾來天下疫病ある毎に朝命によつて百萬遍の念佛を修するが例であつた。

足利義滿が相國寺を創立する時、一條の北油小路に移り、天正年間京極東櫻町に移り、寛文年間今の所に移つたのである。

本堂 南面、本尊は圓光大師の像。その他開山堂（前相）に後奈良天皇宸筆「知恩寺」の額が掲げられてある。阿彌陀堂、勢至堂などがある。

境内墓地に鳥居元忠の墓、日乘上人の墓がある。前者は誠忠義烈三河武士の典型、後者は織田

時代の尊皇家である爲、名高いものである。

後二條天皇陵 寺の東方の畑の中にある。

黒

谷

（上京區岡崎町、東山線熊野神社前より東北六丁）

淨土宗鎮西派の一本山 紫雲山金戒光明寺と云ふ。源空（法然上人）叡山の黒谷より出で、先づ此の處に庵室を創め、世に之を新黒谷といつた爲に黒谷の名が始まつた。

はじめは一小堂に過ぎなかつたが此宗の最初の道場として漸次名が著はれ、後白河天皇以後歴朝の御歸依によつて、益々盛になつた。應仁の兵火後も度々火災にあつた、現今の本堂は天明三年の建立である。

本堂は南向、圓光大師像を安置す。

本堂の前に熊谷直實の鎧懸の松こいふ老松がある。今枯れ木こなつて蔽ひがしてある。

熊谷堂、直實が出家後居住した所だこいふ。

文珠堂、三代將軍秀忠追福の爲に寛永十年に建てたものこいふ。

圓光大師の納骨塔、山崎闇齋、橘南谿なご有名な人の墓が多い。

紫雲石は法然上人が此地へ来たこき初めて座をしめた石だこいふ。

塔頭の西雲院には祇園三女(梶、百合、町)の墓がある。什寶に法然上人自筆の一枚起請文、惠

信僧都筆と傳ふる山越の彌陀の畫がある。

○

黒谷や木魚た、けば風薫る

甲山

黒谷の松や蓮咲く朝嵐

碧梧桐

眞如堂

(上京區、眞如堂町)
(黒谷の北に隣る)

天台宗、鈴聲山眞正極樂寺こいふ。一條天皇の母后(東三條院藤原詮子)の永觀二年に建立する所である。應仁の亂に兵火で焼けその後位置もあちこちに移つたがやがて舊地に復し、寶永二年再建した。十一月六日から十日間行はる、法要は「眞如堂の十夜」こ稱して參詣者が多い。

本堂は西向、本尊は慈覺大師作の阿彌陀佛等。

向井去來、猪飼敬所、海北友松なごの墓がある。

境内楓樹多く、晩秋の頃愛賞の爲に來るものが多い。

如意嶽

(大文字山)

比叡山の一支峰であつて、上京區鹿ヶ谷町の東に聳えてゐる。東山三十六峰の首峰である。海拔四六五米突。有名なる大文字の火はこの山の西面中腹高さ約三〇〇米突の邊に、八月十六日夜に點する精靈の送り火で、大の字第一劃長さ四十間、第二劃八十間、第三劃六十八間、二間毎に薪を積み一齊に點火す。冬日は積雪自ら大文字の形となり雪大文字と稱して之亦壯觀である。大文字の點火は弘法大師が始めたもので、中絶して居たのを東山殿足利義政が復興し、その後繼續してゐるものだに傳へてゐる。

此山を越えて大津へ出る道は、治承四年以仁王が平氏討伐の謀漏れた際、京より逃れ出でて

園城寺へ赴かれた途である。

相阿彌の宵寝起すや大文字

燕村

銀閣寺

(上京區淨土寺町、市内電車熊野神社前停留所及び出町終點より各廿町)

正しくは慈照寺といふ。禪宗臨濟派で相國寺末である。

この地はもろ淨土寺(天台宗)のあつた地で、足利將軍義政、此地に別業を營み、後隱遁して銀閣及東求堂を造る。義政薨後遺命によつて寺とした。

銀閣(保護建造物)寶形造重層、上層を心空殿といふ(禪宗寺院風)下層を潮音閣(書院風)とい

俗稱 銀閣寺といふのはこの建物の爲めに起つた名である。

東求堂(保護建造物) 義政の持佛堂である。純然たる書院作りで同時代の住宅建築の代表的のものである。茶室は茶室を四疊半に作るもの、創始だこいはれてゐる。腰障子、小襖等に狩野元信、相阿彌等の名家の書があつて、數奇を盡した程が惚ばれる。

庭園 如意ヶ嶽の一部を利用して作りたる庭園で、林泉岩石樹木等の配置は相阿彌の意匠で成つたものでいかにも閑雅である。數多の什寶の内足利義政木像は注意すべき足利時代の肖像彫刻であつて、國寶となつてゐる。

我庵は月待つ山の麓にてかたぶく庭のかけをしぞ思ふ

松風や茶煙禪榻風流は國に一人の東山殿

義政 順

京都南部東南部及郡部

東 寺

(下京區九條大宮にある、京都驛の西南約十二丁七條大宮停留所より南八丁)

真言宗の總本山で、正しくは教王護國寺といふ。

桓武天皇平安奠都の初め、羅城門内朱雀大路の左右に東寺と西寺を営ましめて京城の鎮護に充てられたが、後東寺を空海に賜はりて、空海之を真言宗の根本道場としたのである。御歴代の尊信篤く堂宇莊園等漸次増大して、洛南寺院の隨一と稱せられたが、應仁の兵火の爲殆んど全く烏有に歸し、豊臣徳川兩氏の盡力で再興して今に至つた。

金堂(特別保護建造物) 中央にあつて南面してゐる。慶長年間豊臣秀頼の再建で全體の様式は

創立當時の風により細部は桃山時代の風を加へてある。本尊薬師如来。

講堂(特別保護建造物) 金堂の北にあつて南面してゐる。慶長年間豊臣秀吉の正妻北政所の建立したもの。本尊は大日如来。

観音堂 講堂の北にあつて、金堂講堂と南北に一直線に並んでゐる。本尊は千手観音。

五重塔 金堂の東にあつて、高さ百八十二尺餘、我國最高の五重塔である。寛永年間徳川家光の再建したもの。様式は鎌倉時代の風で豪健の趣をもつてゐる。

御影堂(大師堂)(特別保護建造物) 金堂の西の一廊内に灌頂院があり、その北に本坊、尙その北の一廊内に御影堂があつて空海の繪像が安置されてゐる。

南大門(特別保護建造物) 金堂の南にある正門で、以前は壯大なものであつたが、それは焼失した爲舊大佛の崩門を移して建たのである。この門の柱礎は平安京奠都當初の位置をそのまゝ

傳へてゐるので、平安京區劃研究の基準にされる。

八脚門(蓮花門)(特別保護建造物) 観音堂の北にある。諸門中最も古く、文覺上人の本寺再興當時の建物である。

尙東方には慶賀門(北)不開門(南)なごがある。

當寺の什寶は夥しい。後宇多、後醍醐、後光嚴、諸天皇の宸翰、弘法大師筆の風信帳及び七祖像贊、傳教大師筆の請來目錄、加賀藩主前田綱紀が寄進した東寺百合文書(一百個の櫃に收めてある)等何れも貴いものである。

緣日 三月二十一日は弘法大師の入寂の日であるから、御影供が行はれ、遠近の參詣人が群集する。その他毎月二十一日は參詣するものが多く、その爲市内の電車が特別に雑沓する。

西寺 (下京區大内村八條) 平安京奠都の初め東寺と共に置かれた寺であるが、後衰へて、今僅に田圃の

間に一小堂(淨土宗西山派)があるだけで、遺址としては金堂址といふものがあるのみ。

羅城門址(東寺の南大門前) 羅城門は平安城の南大門で、朱雀大路を経て遙かに大内裡の正門

朱雀門、及其の内方なる應天門と相對してゐたのである。平安京の衰へるに共に何時か廢滅して

しまつた。今六軒町通笹屋町南入竹林に約四十間ほどの遺址があるだけである。

○

東寺の塔南に低く霞みけり

虚舟

羅城門今無き京のおぼろかな

三九

鳥羽殿址

(紀伊郡竹田村、下鳥羽村に跨る、京)
(阪電車師團前停留所の西十五丁の邊)

鳥羽上皇の營まれし離宮の址で、その地域百町餘にも及ぶほどの宏大なものであつた。四條天

皇の仁治三年炎上し、後嵯峨天皇が再興なされたが間もなく衰廢してしまつた。今地名に宮殿の名の残つてゐる所がある。

安樂壽院

(紀伊郡竹田村西竹田)
(鳥羽殿址の内である)

眞言宗、本尊は阿彌陀佛。

鳥羽上皇が鳥羽殿の北御殿を寺にされたのである。鳥羽上皇は此處で崩御せられたので此處に葬り奉つた。御陵を安樂壽院に申す。

近衛天皇陵 本堂の南に多寶塔のある所。

白川天皇陵 安樂壽院の西三町の所にある。

京都南部東部及郡部

鳥羽殿に五六騎いそぐ野分かな

燕 村

この附近は維新の際幕軍が薩軍に破られた戦場である。上鳥羽、下鳥羽の二村は古多く歌に
詠ぜられた所である。伏見街道の戦ひは墨染の邊で行はれたといふ。

飛ぶ雁の行へは霧にうづもれて鳥羽田の千町夕ぐれにけり 秋 成
山城の鳥羽のわたりに作る田の實になる人は少かりけり 知 紀

泉 涌 寺

(京都市下京區今熊野町、京阪電車「鹽小路」
東南十三丁、市電「妙法院前」東南十丁)

眞言宗泉涌寺派の大本山であり。初め弘法大師が基を開き法輪寺と云つたが、文徳天皇の御代
に藤原の緒嗣之に大修理を加へて天台宗とし仙遊寺と改めた。順徳天皇建保五年俊祐律師出で
て眞言・天台・禪・律の四宗兼學とし、又境内に清泉が涌出するので泉涌寺と改めた。貞應年中に
勅願所となり、仁治三年四條天皇を此の山に葬り奉つて以來は屢々至尊の御葬所となり、遂に
後土御門天皇以後は御歴代の陵域と定められた。

總門を入つて老松の並木を眺めつゝ、稍進むと道は二つに岐れる。左に進めば孝明天皇御陵に、
右に進めば中門に出る。

中門の左に釋迦堂が在る。後水尾天皇の建立で隠元禪師の傳來した三平釋迦を安置する。其に並んで觀音堂が在る。東福門院の建立で、本尊聖觀音は唐の玄宗皇帝が楊貴妃追福の爲に其の容貌を模して、皇帝親ら彫つた者だご稱する。

佛殿は西面し、二重屋根の建物で、中央に彌陀、右に釋迦、左に彌勒を安置し、脇壇には伽藍神・天照太神・今上牌及び開山の像などを祀つてある。

佛殿の東に西面して舍利殿がある。これは釋尊滅後千六百年を経て唐の白蓮寺に傳來した佛舍利を俊仍の弟・湛海が入宋の節請ひ受けて當寺に納めたのである。又舍利殿の後に俊仍の像を安置する開山堂が在り、其の東に方丈があつて、方丈の構内には歴代天皇・皇妃の尊牌を奉安する所の靈妙殿がある。寺號の因つて起つたといふ泉涌水は佛殿の西南なる崖下に在る。域内に在る御陵は左の通りである。

月輪十二陵 泉涌寺後山に在る。四條・後水尾・明正・後光明・後西院・靈元・東山・中御門・櫻町・

桃園・後櫻町・後桃園十二帝の陵。

泉涌寺陵 泉涌寺後山に在る。後光嚴・後圓融・後小松三帝の分骨塔であつて、稱光帝の灰塚も此處にある。

後月輪陵 泉涌寺の後山にある。光格・仁孝二帝の御陵である。

後月輪東山陵 後月輪陵の東に在る。孝明天皇の御陵である。

後月輪東山東北陵 英照皇太后の御陵である。

觀音寺陵 今熊野の音の東南に在る。後堀川天皇の御陵である。

右の外皇妃・親王等の御墓も澤山に在る。

東山院の御葬禮を拜み奉り、

御車は闇の月夜のなぐれかな

鬼 貫

大和大路の東、泉涌寺の山口に當つて、今熊野川に架したる橋を「夢浮橋」といふ。此の名は源氏物語より出たもので、無常所への通路さういふ意味である。南鳥部野(阿彌陀峰の南側)といふ墓地が此の近くに在つたから斯くは名付けられたのである。

泉涌寺から二三町北へよつた所に「今熊野觀音」が在る。寺はもと藤原緒嗣の第であつたのを後に寺としたので、當時は上下の尊信も厚く、僧房伽藍巍々として聳えてゐたが、應仁の兵燹に罹つて後には見る影もなくなり、今は本堂が一棟あるばかりである。本尊は十一面觀音。西國巡禮第十五番の札所である。

○ 昔よりたつとも知らぬ今熊野佛のちかひあらたなりけり (順禮歌)

今熊野觀音の南方に「悲田院」がある。悲田院は孤兒・病者を保護する爲に光明皇后の創設せられた病舎で、京都へ都を遷されてからも東西の兩院があつた。西の悲田院は、太秦の邊に設けられたらしいが後が分らぬ。東の悲田院は始め三條賀茂川の西涯に設けられ、其の後數回の火災に逢つて荒廢したが、仁安三年の罹災以來再興せられず、遂に寺院になつて漸く遺形を存するに過ぎなかつた。後此の寺は京北安居院の東に移され、更に正保二年を以て此の地に移されたのである。本尊は作者未詳の阿彌陀佛立像。眞言宗。泉涌寺の塔頭である。

東福寺

(京都市下京區本町十五丁目、
京阪電車「東福寺前」東入二丁)

慧日山東福寺は臨濟宗東福寺派の大本山で、京都五山の第四位に數へられた巨刹である。開基は僧辯圓で、藤原道家が之を創立し、賴經・賴嗣が工を助けて、建長七年に落成したのである。當時結構の莊麗は天下に比ひなく、寺名も南都の東大寺と興福寺とを併せたといふ所から東福寺と云つたのである。其の後屢々修覆を加へられて愈々華麗を極め、殊に京洛に於て火災を免れた唯一の寺として、大和の法隆寺と並び稱せられたが、惜しい哉明治十四年に炎上し、佛殿は今に至るまで再建されない。併し幸に焼失しなかつた堂宇を見れば當時の盛觀を偲ぶことが出来る。

總門は南北中の三方にある。南總門を入るに山門(特別保護建造物)に出る。之は重層入母屋本瓦葺五間三戸の樓門で、寺傳には鎌倉時代の建立、應永年間足利義持の修繕とあるけれども、其の構造手法等は室町時代中頃の者と思はれる。樓上には釋迦像を安置し、東西の兩壇に十六羅漢を置く。皆定朝の作だといふ。三門の遺物中で最も古い。

山門の後にある新しい建物は方丈である。

山門の左手には假本堂がある。貞和二年の再建で、無準禪師筆「選佛場」の額を掲げてある。

堂の中央に釋迦、脇士に阿難・迦葉、左壇に大梵天・帝釋天・文殊菩薩・大日如來・佛海禪師の像等右壇に達磨・臨濟・百丈・開山國師等の像を安置する。

假本堂の北にある轉輪藏には宋版の一切經が納められて居る。

假本堂から祖師堂へ行く間に洗玉瀾と稱する溪水があつてそれに通天橋が架してある。溪間紅

葉が多く晩秋梢の色づきわたつた頃此の橋から瞰下した景色は京都名所の一に數へられて居る。

○ 通天の下に火を焚く紅葉かな

子規

祖師堂(特別保護建造物)は俗に開山堂と稱し、中央に開山國師の像を安置する。寛元四年九條家の建立で、正面には伏見院の宸筆「聖一國師」の額を掲げ、左右兩壇には達磨・臨濟・百丈・無準の各禪師、辨財天・毘沙門天・韋駄天並に藤原道家の像を祀つてある。寺傳には貞和二年の再建とあるけれど、様式は室町中期以後の者である。

通天橋畔にある月華門(特別保護建造物)は普門院の總門で、創立年代は判らないが、もこ禁裡に在つた月華門といふのを文永年間に龜山天皇が賜はつたのである。

東司(特別保護建造物)とは即ち便所のことで、寺傳には嘉禎二年の創建とあるが、形式は室町

中期以後の者である。便所が保護建造物になつてゐるのは珍らしい。

浴室(特別保護建造物)は單層切妻造。建立年代は判らないが、足利時代の者に相違ない。

萬壽寺 は北總門の内にあつて臨濟宗である。もこ白河上皇の建立で萬壽寺通り柳馬場の西にあつたが、應永年間五山の第五位に列に加へられた。此の地に移されて當寺の塔頭となつたのは永享六年の火災後である。

愛染堂(特別保護建造物)は堂形八角にして、愛染明王の坐像が祀つてある。建立年代は分らぬが、足利時代の者と思はれる。

鐘樓(特別保護建造物)は重層入母屋造。建立年代は不明だがやはり足利時代らしい。

東福寺では毎年三月十五日に兆殿司の畫いた涅槃の圖を展覽させ、又十一月の十七日には開山忌を行ふ。共に非常な入出である。

晝燭す涅槃の像や東福寺

露石

本寺には嘗て明兆(兆殿司)が殿司の職に在つたので其の遺筆が澤山ある。又東福寺莊園文書七通・聖一國師度牒戒牒各二幅・聖一國師像一幅・無準像一幅は國寶になつて居る。

本寺の境内に次の諸陵墓がある。

仲恭天皇陵——山門より二丁餘東南の山腹にある。

皇嘉門院陵——仲恭天皇陵の下方にある。

内山本廟——九條兼實を祀る。佛殿の東二丁餘にある。

九條道家墓——山門より二丁餘東南の山上にある。

藤原俊成墓——佛殿の東南二丁の山中にある。

兆殿司墓——俊成卿墓の附近にある。

稻荷神社

(紀伊郡深草町にあつて伏見街道「當る、奈良線」稻荷「驛前」京阪電車「稻荷」停留所前)

當社はもろ三箇峰山上に祀つてあつたが、嵯峨天皇の時南麓に遷座せられ、更に後花園天皇の永享十年に今の地に遷された。福德を授け給ふ神として世人の信仰厚く諸國より參詣する者極めて多い。明治四年五月官幣大社に列せられた。祭神は倉稻魂神・素盞鳴尊・大市媛命の三座であつたが後世に及び田中神・四大神を配して五座とせられた。

當社は元明天皇の和銅四年に秦公伊呂具が創めて祀つたのである。神祇資料といふ本に「初め

伊呂具家富み餅を以て的に、化して白鳥となり、飛翔りて三箇峰の平處に在り、稻成り生ひき。事甚だ靈異なるを以て伊呂具之神として祭り名附て伊奈利といふ。こある。

本殿は明應三年(皇紀一四九四)の建築で特別保護建築物である。

祭禮は毎年四月上旬の卯の日に行はれる。此の日朝廷は祭使を立て、幣帛を奉る。又二月の初午の日には「初午詣」云つて貴賤群集し境内の杉の木の小枝を採つて持還る行事がある。これを「験の杉」といふ。

狐を稻荷神の使といふのは如何いふ因縁かよくは判らないが、稻荷神は一説に大氣津比咩といふのでキツは食音音が似て居るから附會したものだらう云はれて居る。

社殿の後なる稻荷山は深草山の北部であつて、其の頂を三箇峰といふ。澤山の朱塗の鳥居が立並べられて、其を傳うて登る各所に色々の稻荷が祀つてある。其を順拜するこを俗に「お

山廻り」云つて居る。紅葉の頃の山中は非常に景色がよい。

○

清少納言

稻荷に思ひ起してまわりたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じて登るほどに、いさゝか苦しげもなく後れて來て見えたる者共の、唯行きに先立ちて詣づる、いさうらやまし。二月午の日の曉に、いそぎしかど、阪のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりけり。やう／＼暑くさへなりて、誠にわびしくて、「なご、かゝらでよき日もあらんものを、何しに詣でつらん。」とまで、涙おちて休むに、三十分あまりばかりなる女の、つば装束などにはあらで、唯ひきはこえたるが、「まるば七度まうでし侍ぞ。三度は詣でぬ。今四度は事にもあらず。未には下向しぬべし。」と、道に逢ひたる人に言ひて、下り行きこそ、只なる所にては目も止まるまじきこと、彼が身に只今ならばやと覺えしか。(枕草紙)

藤森神社

(深草町の南部、鳥居崎町、伏見街道東側)

素盞鳴尊、日本武尊、神功皇后、別雷神、應神天皇、仁德天皇、武内宿禰、崇道天皇、天武天皇、井上親王、伊豫親王を祀る。(上代、この地方に繁衍した秦氏の祖を祀つたものであらうといふ説がある。)府社。

はじめは稻荷山の麓にあつたが稻荷神社が三ヶ峰より今の地に遷坐の時、本社も此に移つたのだといふ。六月五日の例祭は深草祭と稱して武者行列を行ひ、参詣の人が雑沓する。主なる建物

大將軍社々殿(足利義教造立、特別保護建造物)、八幡宮本殿(同上)

石峰寺の五百羅漢

(深草町の内稻荷社南二丁)

石峰寺は禪宗黄檗派、寶永年間の創建、五百羅漢の石像は後山にあつて、伊藤若冲の圖案に依つて出来たものだといふ。山下に若冲の墓がある。

寶塔寺

藤原基經の建てたもので、もこ眞言宗であつたが、今法華宗となつてゐる。本堂は天正中の再建多寶塔と四脚門とは室町初期、建築で特別保護建造物となつてゐる。

瑞光寺

寶塔寺の南にある。寶塔寺の薬師堂の遺跡を元政上人(俗に深草の元政といふ)が再興して住んだ所である。寺内に元政上人の草庵及び墓がある。

竹二本僅かに立てり深草や清きひじりの奥つき所

昌

綱

月に花に法の杖なり竹三本

蓼

太

深草

古へ草深い野邊として文學上に名高い所で、屢和歌に詠せられてゐる。この地は稻荷の

京都南部東南部及郡部

所在地ではあり、奈良街道に當つて、京都伏見を連ぬる通路として近世町並つゞき、漸く殷賑の地となりつゝ、あつた所、第十六師團が置かれ、歩兵騎兵等の兵營が置かれるやうになつて急に發展し、最近町制を布いた。

○

夕されば野への秋かぜ身にしみて鶉鳴くなり深草の里

俊成

深草の里の月かげ寂しさも住み來しまゝの野への秋かぜ

通具

いなり山三つの高嶺に雲立ちて夕立すなり深草の里

知紀

御陵(瑞光寺の南) 深草には所謂「十二帝陵」と稱する深草法華堂陵及仁明天皇の深草陵がある。十二帝陵は後深草、伏見、後伏見、後光嚴、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成の御陵である。

伏見

(京都府紀伊郡の町、京都市の南二里十八丁)

京都市に次ぐ名邑で、南に宇治川を帯び西に高瀬川、疏水を繞らし、奈良街道に沿ひ京阪電車、京都市營電車、奈良線鐵道が通じてゐて交通が頗る便である。繁華な所は新町通、大手通等で、觀月橋は月見の名所、桃山は梅の名所として名高い。この地は古く史上に名は聞えてゐたが、人家の少い草原であつた。豊臣氏が桃山に築城し淀川の水運を利用して大阪と通ずるやうにしてから急に都會地となつた。徳川時代には西國大名の參觀の通路でもあり、又大阪より水路を経て京都に入る入口であつた爲、繁榮を續けて來た。桃山兩陵が置かるゝに至つて參拜の人の出入多く益々殷賑の地となつた。人口三萬餘。

いめ人の伏見の里を朝行けば梅が香ならぬ風なかりけ

桃の花見えこそわたれいめ人のふしみの里の春のあけぼの

伏見の町ほし並べたる人形を笑うて撫でて春の風吹く

木槿垣伏見の營所隣りけり

知紀

直好

竹雨

観魚

伏見桃山御陵 伏見桃山東御陵

(紀伊郡堀内村字古城山、奈良線桃山驛より
十丁東、京阪電車桃山停留所より十五町東)

一 陵のある所は、伏見町の東に當つて、もも豊臣秀吉の居た桃山城の地である。御陵の御位置は桃山城の本丸のあごの稍南方に當るこいふ。桃山陵は明治天皇を、同東陵は照憲皇太后を葬り

奉る。

伏見城址

文祿三年豊臣秀吉が諸侯に課して築き、聚樂邸から移つて居城とした所で規模壯大(方五十町)であつた。秀吉が明使を引見したのも此の城であつたが、慶長三年八月此で薨じた。同四年秀頼大阪城に移るに及び家康居城して天下に號令した。關ヶ原戦争の際には西軍が攻めてこれを陥れた。後修理が出来家康家臣をして此に居らしめた。元和六年本城を毀してその建築の一部(宮殿門廊等)を所々に移す。その後全く廢城となつたが、本丸、西の丸、松の丸、名古屋丸、天主閣等の址は歴々として残つて居る。(位置は伏見町の東、堀内村の北部の丘上、標高百米)。桃山城建築物の遺つてゐるものは、西本願寺の唐門、同書院、豊國神社の唐門、高臺寺の表門、竹生島の都久夫須麻神社及び寶藏寺などである。

この外伏見の史蹟名勝には寺田屋跡(東濱にあり、中書島の北三町)、光明天皇陵(奈良線桃山驛

の東南六町、薩摩義士の平田鞆負の墓、匠町大黒寺の墓地、三夜莊(本派本願寺の別莊、城山の南端月見が丘の上)なごがある。

月見せん伏見の城のすて廊

去 來

乃木神社

(桃山陵参道の南にある)

乃木希典及同夫人静子を祀る。村野山人が建てたのである。

御香宮

(紀伊郡伏見町、京阪電車桃山停留所より東約三丁北側)

祭神は仲哀應神二帝、神功皇后外六柱。府社。表大門は伏見城の遺物で、特別保護建造物となつてゐる。

伏見の義民を稱せらるゝ文殊九助等の碑は境内南門の傍にある。

桓武天皇柏原陵

(桃山陵の参拜路より北十丁、京阪電車丹波橋停留所の東七丁)

初め深草柏原に造置せられたが、水害の爲毀損したので現在の位置に移修せられた。初めは規模大にして登が十餘丈、壇の廻りが九十丈もあつたといふが桃山城築造の時甚しく毀れて縮少し今丘形は存してゐない。

木

幡

(奈良線の一驛、京都より六哩六字治郡宇治村)

この地奈良街道に當り文學上歴史上に名高い。

山城のこはたの里に馬はあれどかちよりぞゆく妹をおもへば 人 麿

木幡の諸陵

藤原冬嗣以下藤氏歴代の諸墓並に皇孫皇子の陵墓が木幡の邊に多い、併し中世以後荒廢して多くは辨別しがたいのは惜しむべきである。

黄蘗山萬福寺

(宇治郡宇治村字五ヶ庄、宇治驛より東北廿丁 京阪電車「黄蘗」停留所の東二丁)

黄蘗禪宗の本山。

承應年間(二三二四)歸化した明の僧隱元が後水尾法皇の宣旨に依つて寛文年間に創建した寺である。

諸堂は其の當時の建立で何れも特別保護建築物である。殊に本堂は全部チーク材を用ひてあるので名高い。諸堂の配置が禪宗寺院建築の特色を表してゐるのに注意すべきである。

天明の頃までは支那僧の住持するものが多かつたから建築その他支那風のところが多い。山門を出れば日本の茶つみうた」がその有様をよく現してゐる。

三室戸寺

(宇治郡宇治村字菟道字)
(治橋より東北十二丁)

天台宗に屬し、本尊は八寸二分の千手觀音、寶龜年間(一四三〇年代)に僧行表の開基した所で西國三十三所第十番の札所である。

よもすがらつきをみむるご分けゆけば宇治の川瀬に立つは白波 (願嶽歌)

菟道稚郎子の御墓

(京阪電車「宇治」終點の北五丁、奈良街道の)
(西、田崎の間に見える松林がそれである)

應神天皇の皇子でこの地に生まれた。兄君大鷦鷯尊に位を譲られて自害されたのは人のよき

知る所である。墳は前方後圓の車塚。

橋

寺

(久世郡宇治町、京阪電車)
(「宇治」終點の東南一丁)

律宗で、放生院常光寺といふ。道登、道昭の二僧が大化二年宇治橋を架けたとき立てた寺であるが今は後世の小堂があるだけだ。庭内に宇治橋の斷碑がある。この碑は橋の竣工の際其功績を後世に傳へる爲に造られたが、いつの間にか土中に埋もれ碑文だけ帝王編年紀によりて傳へられて居つた。然るに寛政三年(一四五一)四月寺境の溝の中から上半を發掘したので、下半を尾張の人中村維禎が修補したものである。

碑文

洸々横流	其疾加箭	脩々征人	停騎成市
欲赴重深	人馬亡命	從古至今	莫知枕葦
世有釋子	名曰道登	出自山尻	惠滿之家
大化二年	丙午之歲	構立此橋	濟度人畜
即因微善	爰發大願	結因此橋	成果彼岸
法界衆生	普同此願	夢裡空中	導其昔緣

多賀城の碑(宮城縣)多胡の碑(栃木縣)と共に日本三古碑と稱せらる。

橋寺や法師はあらず然れども茶の木の畑に梅一木咲く

秀真

宇治神社

(久世郡宇治町、京阪電車「宇治」停留場の東南三丁)

祭神は菟道稚郎子命。

應神天皇の離宮で命の住居の跡といふ、神社は二座あつて上社は醍醐天皇時代の建築物、その屋蓋は鎌倉時代のもので、現存せる我國神社建築物中最も古いものである。

興聖寺

(久世郡宇治町、宇治神社の東南二丁)

曹洞宗、山號佛徳山。朝日山の半腹にある、開祖は道元。我國最初の曹洞禪寺、今の建物は應安年間淀城主永井氏の建造したものである。境内躑躅山吹多く風景が佳い。

京都南部東南部及郡部

朝日山 興聖寺の後の山(標高百三十一米)、その東に聳えるのが喜撰山(標高四百十六米)で、共に古來詩歌俳諧に詠ぜられてゐる。

○

ふもさなば宇治の川霧たちこめて雲井に見ゆる朝日山かな	匡	房
都をば夜ごめに出でて朝日山朝風涼し宇治の川つら	秋	成
朝日山高れほのかにかげそめて霞にしづむ宇治の川波	直	好
鮎汲や喜撰が嶽に雲かゝる	几	壘

○

月こそいづれ朝日山、山吹の瀬にかけ見えて、雪さし下す島小舟、山も川もおぼろくさして、是非なわかぬけしきかな。(謡曲「頼政」)

宇治川

琵琶湖に發し、瀬田、石山、南郷を経て、鹿跳灘、浙米瀬(宇治を去る二里)の奇勝を過ぎ此地に來り(この間約五里)尙西北に流れて、桂、加茂、木津の諸川に合し淀川となる。

京都南方の要害であるから源平の役、承久の亂、吉野時代の戦ひには京都に入らんとする軍に防禦軍の激しい衝突が此處にあつた。

○

橘小島崎 は宇治橋の北二丁餘、佐々木高綱、梶原景季の先陣を争うた所である。

くれて行く春の湊は知られども霞におつる宇治の柴舟
寂 蓮
ものゝふの八十うら川のあじろ木にいざよふ波の行方知らずも
人 慶

朝な／＼水のうき霧うきながら流れて下る宇治の山もこ
壑とぶ川瀬の波は夏なれど松 寒し宇治の山もこ
柴舟のあまの白波たちかくれ行方も見えぬ宇治の川霧

知 紀
斐 雄
廣 足

浮島の塔

浮島は平等院前の宇治河中にある一小島である。塔は弘安九年(一九四六)宇治橋再興の際建てた高さ五丈八尺の十三重の石塔、寶曆六年(二四一六)の洪水で壊没したのを明治四十年に發掘して再建したものである。奈良般若寺の十三重石塔と共に名高い。

宇治川發電所

(興聖寺の北)

南郷より水を引いてこゝで發電し、大阪、京都方面に配電して居る。

この宇治川の水力を利用しての發電量は、既設三二二、〇〇〇キロワット、工事中一四、七六八キロワット、計畫中一四、七六八キロワット、計七四、七六八キロワットである。(大正二二、五、一四日出新聞による)

宇治橋

(奈良街道に當り宇治川に架つてゐる)

孝徳天皇の大化二年奈良元興寺の僧道登、道昭、勅を奉じて架したのが創めで、其後兵亂や洪水の爲屢破損してはかけかへられた。長さ八十三間餘、左岸近くに「三の間」にて廣さ一間許り南に張り出た所がある。往昔橋姫社の鎮座した跡で、豊臣秀吉のとき、橋下の水が清冽で茶

の湯に適するので、此處から釣瓶で汲上げさせたを傳へてゐる。
宇治橋の邊は古來螢の名所として名高いが今はあまり發生しない。

宇治町

(奈良線の一驛、京都府久世郡に屬す。京都より九哩二)

古の宇治郷の地で、山川の風景が優れてゐるので、平安時代貴紳の別荘地となり、又奈良街道に當つて東國より京都に入る要地である爲、屢古戰場となつた。宇治茶も亦この地の名を天下に轟かしてゐる。人口四千餘。

平等院

(久世郡宇治町、京阪電車宇治停留所より南約六丁、奈良線宇治驛より東南約十二丁)

初めは天台宗、今は淨土宗。

源融の別墅であつたのを藤原道長買得し、その子頼道が永承年間(一七〇〇年代の初め)に寺とした。その當時の寺域は殆ど現宇治町全部に及んでゐるが、數度の兵火にかゝり、當時の建物は阿彌陀堂即ち鳳凰堂を残すのみである。

鳳凰堂(特別保護建造物) 永承八年(一七一三)の建造、中堂・兩翼・後尾の四部より成り、中堂は三間四面、重層入母屋造、瓦葺、屋上に一對の銅鳳が置いてある。本尊丈六阿彌陀佛は名工定朝の作、壁畫淨土九品の相は宅磨爲成の筆、長押に二十五菩薩を懸け、天井、佛壇、天蓋等の美しさ實に藤原全盛時代の美術工藝の粹を集めたものである。

釣殿 觀音堂と稱し十一面觀音を安置し、鎌倉時代の建築物と云はれ特別保護建造物である。
鐘樓の鐘は印度製と云ひ傳へてゐる。其の形がよく、高雄の神護寺のものは銘、大津三井のも

のは音によつて名高く、この三つを日本三鐘と云ふ。鐘樓も六本柱で珍らしい。
扇の芝 源三位頼政が以仁王を奉じ平氏を亡ぼさんとして軍を起し、この地に戦ひ敗れて治承四年五月二十六日自刃した所と云ふ。頼政の墓は塔頭更勝院の境内にある。

○ 埋木の花咲く事もなかりしにみのなる果ぞ哀なりける

頼 政

○ 冬木立風風堂の屋の上に鴉聲して寒き川水

常 隆

はら／＼さこぼるゝ櫻運櫻扇の芝は悲しき所

綾 足

春くるゝ平等院のおばしまに今美しく山櫻ちる

清 子

縣 神 社

(平等院の東隣)

平等院の地主の神で木花咲耶姫尊を祀つたものといはれる。世人の尊信甚だ厚く、参拜者も随分多い。毎年六月五日の例祭は夜半に行はれ縣祭とて有名である。

宇 治 茶

宇治木幡地方では盛に茶を栽培してゐる。足利時代に梅尾(紅葉の名所)の種子を移したものだといふ事だ。豊臣秀吉が伏見に居つて茶事を盛にした爲益々其の名が著れて來た。碾茶、煎茶、玉露等を製す。

茶つみうたうたひさしてや宇治山の山時鳥初音きくらん
木の芽摘む乙女が歌に時鳥聲かはすなり宇治の山里

直好
教子

日ひの

岡をか

（京都市粟田口より宇治郡山科へ出づる）
阪市電鴨東線の線上終點はその西側

宇治郡の北端で華頂山の東麓に當る。東國より京都へ入る通路である。

京津電車 三條大橋東詰より起り粟田口、日岡を経、國道東海道に沿うて山科村の北部を貫き
逢阪山の隧道を抜けて大津市の札の辻に至る。延長六哩六。

啼く雉子聲もけあげさ聞ゆなりのぼる朝日の岡越にして

知紀

ぐれやすき秋の日の岡月になりて大津へ歸る馬道や啼く

忠秋

元慶寺

（宇治郡山科村字北花）
（山日岡の南十丁）

花山寺ともいふ。眞言宗で、陽成天皇降誕の際母后藤原高子の創立した寺。六歌仙の一人僧正
遍昭の住したこみや、花山天皇がこの寺で落飾されたこみなごで名高い。屢火災にかゝつて衰
へ今さゝやかな本堂に本尊の藥師佛（遍昭作）を安置し花山天皇の宸影を脇に安んじてある。

天智天皇陵

（宇治郡山科村字御）
（陵日岡の東七丁）
國道の北側に參道の入口がある。

山科本願寺別院 蓮如上人の墓

(宇治郡山科村字東野、東海道線山科驛の西南十丁)

山科村を南北に貫く奈良街道に沿うて、北に東本願寺別院(本堂は南面)その南二町に西本願寺別院(本堂は西面)西本願寺別院の西に奈良街道を隔て、蓮如上人の墓がある。實如上人の墓は東本願寺別院の東三町にある。

蓮如上人(本願寺第八世)文明十年北國より歸りて、此處に本願寺を中興す。蓮如、實如、證如の三代五十三年間繼續し、寺域廣く堂舎多く、その盛宛然佛國の如くであつたが、天文元年延暦園城二寺の衆徒等に焼かれて烏有に歸した。今ある別院の堂舎は安永天明の頃重修したものである。

○

行きゆけば竹村のあなたこなたより驚うたふ山科の道
道のへの竹葉の霜に朝日さし小鳥よく啼く冬の山科

嘉 朝
柴 舟

佛光寺遺址

(山科村字那辻、山科別院の南十丁)

今京都市内にある佛光寺は、眞宗開祖鸞上人越後の配所より歸洛してこの地に創立し、第七世了源上人が元應年間本山の澁谷に移轉する迄約百年間此處にあつた。今遺址に石標を立て、ある。

田村塚

(宇治郡山科村字栗栖野、東)
(海道線山科驛の南約一里)

俗に馬背うまのせといふ。坂上田村鷹さかのうえのたじりまろの墓はかである。明治二十八年めいじ修治しゆじせられたのである。

えみし等を鎮めしのみか古塚となりても君が御代守りけり 千浪

大石良雄潜居の地

(宇治郡山科村字西野山の西南岩)
(屋寺の境内田村塚の西十丁餘)

赤穂義士の統領であつた大石良雄が居たといふ所謂山科閑居の地である。安永年中記念の爲に建てた碑がある。

山科過大石氏宅趾

小野湖山

豫讓スルモ稱ニ國士ト 不レ過ギ刺シ衣ヲ死セニ

海島ノ五百人

唯是シ擾々ノ爾

偉哉大石氏 千秋誰倫比

忠義出心肝

謀略極危詭

得レ士四十餘 進退臂使指

一舉シ大讎

迅速疑神鬼

當ニ其ノ緇晦ト時ニ 起ニ臥シ肉ヲ絲ヲ裡ニ

馬牛ノ從ヒ讖ヲ嘲ニ

談笑忍羞恥

益信餘裕多シ 伎倆豈止此

我過キ山科郷

觀ニ其ノ故宅ヲ趾ニ

俯仰空歎息 九原不レ可レ起

濁江の深みに魚は沈むとも何かはせみの取らでおくべき

良雄

隨心院

(宇治郡山科村小野、山科驛より南一里十町)

眞言宗古義派の大本山。本尊は仁海作の如意輪觀世音。隨心院門跡又は小野御殿といふ。寛仁年間(紀元一六八〇年頃)仁海僧正の草創。始め牛皮山曼荼羅寺と云つた創立後の殿堂は應仁の兵燹に罹つて失せ今のは徳川氏の始め(寛永正保の頃)再興せられたのである。

寺寶中木造阿彌陀如來像と愛染曼荼羅圖とは國寶である。

當院の地は小野小町の宅址だといふ傳説がある。又寺傍の藪の中には小町が化粧水を汲んだといふ小町井や、其の井から流れ出る小川に架した化粧橋なごがあるけれどもいつれも附會の説らしい。

醍醐天皇陵

隨心院の東方三町ばかりの田の間にある園塚である。

朱雀天皇陵

醍醐天皇陵の南三町ばかり人家の東裏にある。

若竹に家重りぬ小野醍醐

蝶夢

勸修寺

(宇治郡山科村字勸修寺、東海道線山科驛より南一里十町)

龜甲山に號し、眞言宗古義派の大本山。醍醐天皇の勅願所にして、本尊は同天皇等身の千手觀世音。法親王入住の門跡であつたから世に勸修寺門跡とも山階宮とも云つて居た。維新の際には山階宮晃親王が在りましたのである。

寺の在る處は天皇母后藤原胤子の外祖宮路彌益の邸宅の在つた地で、昌泰三年(紀元一五六〇)に天皇が太后の旨を受けて創建せられたのである。當初は壯麗を極めたが、文明二年兵燹に罹り徳川氏に至つて漸く再建せられたのである。今の堂宇中宸殿と書院とは元祿の頃明正天皇の舊殿を賜はつたもの、本堂は寛文の頃假内侍所を賜つたもので、書院は特別保護建造物である。庭前の氷室の池は延喜式に見ゆる栗栖野氷室の地。園池雄麗である。

勸修寺は藁屋の宮や梅の花

許六

栗栖野の氷室のこほりいつ迄か結ばはれつゝさげんすらん

相模

眞萩ばら千草の糸もくるす野に日を経る織るや錦なるらん

雅縁

醍醐寺

(宇治郡醍醐村、東海道線山科驛より南一里) 十六町、京阪電車「六地藏」より東北一里

眞言宗古義派の總本山。山號は深雪山。醍醐寺は一山の總稱であつて、別に醍醐寺といふ一宇の寺があるのではない。堂宇は山上と山下に別れ、山下を下醍醐といひ山上を上醍醐といふ。貞觀十六年、理源大師が此の地に修業の道場を開いたのが本寺の創りである。醍醐天皇の臨幸ありて山下に釋迦堂を建立せられ、次いで朱雀天皇法華三昧堂を建立遊ばされたが、今は其の址もない。幸にも村上天皇建立の五重の塔が尙残つて居る。盛時は山上に二十七院山下に六十五院の僧房があり堂塔伽藍が境内に充滿して居た。永久三年十四代の座主勝覺權僧正が鳥羽上皇の歸依を得て三寶院を創め、續いて理性院・金剛王院・無量壽院・報恩院が起り、之を醍醐の五門